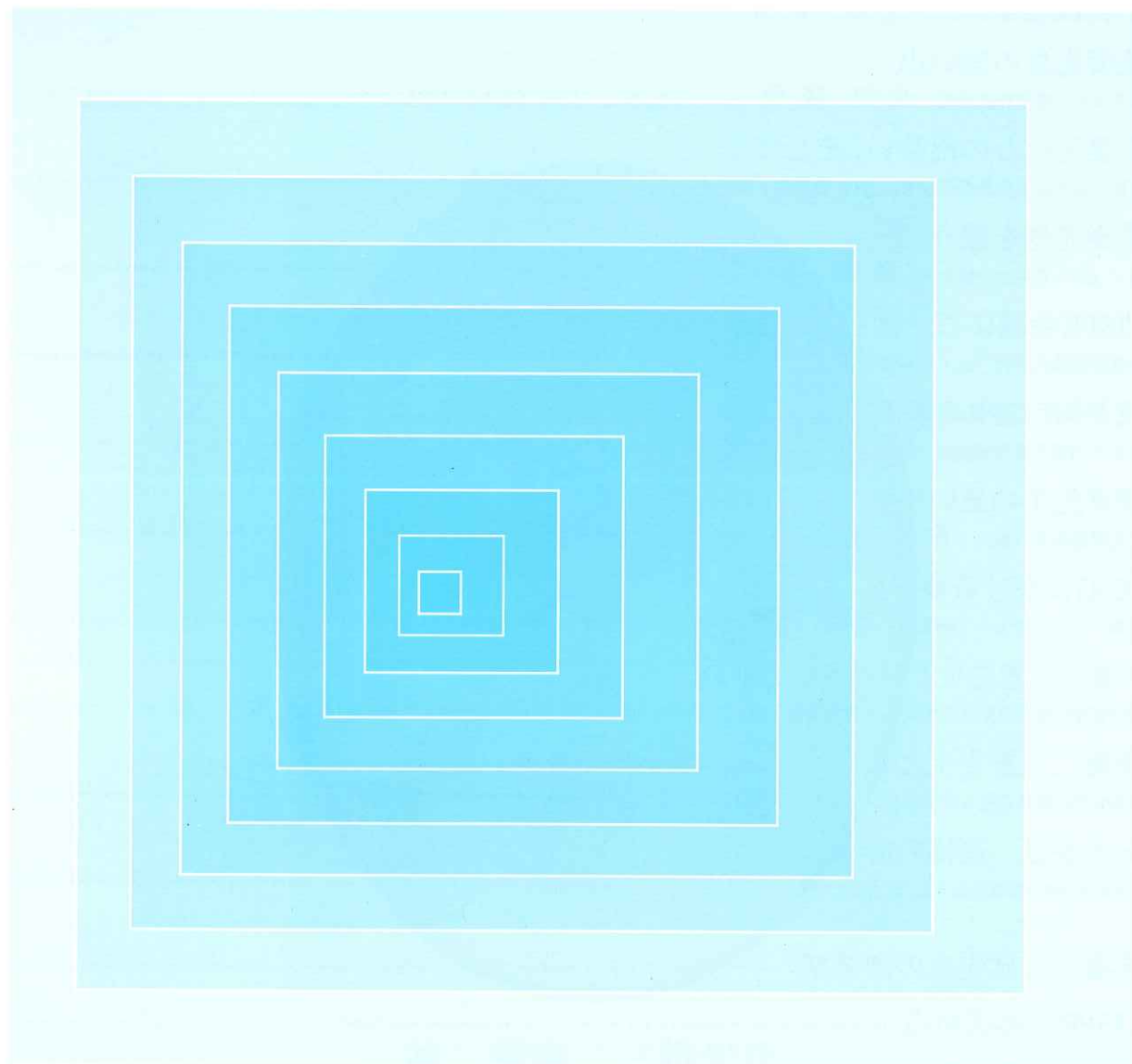


EMCCレポート

蓑妻二三雄先生追悼文集



不要電波問題対策協議会

平成12年12月発行

EMCCレポート ～蓑妻二三雄先生追悼文集～

● まえがき	不要電波問題対策協議会 前会長 顧問／東北大学名誉教授 東北学院大学名誉教授 佐藤 利三郎	2
● 電波環境行政とCISPR	郵政省電気通信局電波部電波環境課長 浅見 洋	4
● 蓑妻先生の思い出	元・NHK総合技術研究所 遠藤 幸男	6
● 蓑妻先生の思い出	スタンレー電気株式会社 近田 隆愛	8
● 蓑妻先生との出会い、そして	(財)日本品質保証機構／旧 (財)機械電子検査検定協会 岡村 万春夫	11
● 蓑妻先生を懐く	元・(財)電力中央研究所 澤田 嘉嗣	13
● CISPR会議にご一緒して	能美防災株式会社 (元・日本放送協会) 黒沼 弘	16
● 我が国CISPRの産みの親	東北大学電気通信研究所 杉浦 行	18
● 蓑妻先生の思い出	松下電器産業(株) 井上 正弘	22
● SC-Gにかける夢	(株)オプトウェーブ研究所 結城 主央巳	24
● 蓑妻二三雄先生との出会いと別れ	CISPR国内委員会第2代委員長／東北文化学園大学科学技術学部学部長／応用情報工学科教授 高木 相	26
● 蓑妻二三雄先生と私	CISPR国内委員会第3代委員長／東京農工大学工学部 仁田 周一	28
● あとがき 追悼の辞	不要電波問題対策協議会会長／名古屋工業大学 池田 哲夫	31
● 蓑妻二三雄先生の御業績		32
● CISPRの審議組織		33
● CISPR国際会議出席状況		34

EMCCレポート
蓑妻二三雄先生追悼文集



故 蓑妻二三雄先生



まえがき

不要電波問題対策協議会 前会長 顧問
 東北大学名誉教授 東北学院大学名誉教授
 佐藤 利三郎

蓑妻二三雄先生（1916.9.28～1999.6.3）の追悼号について。

蓑妻二三雄先生が平成11年（1999）6月3日に御逝去あそばされてから、約1年半経過しました。本協議会の創設と、つづいて委員として御指導を賜った、今はなき先生の追悼記編集のことが不要電波問題対策協議会企画委員会で提案され、本協議会の機関誌であるEMCCレポートに蓑妻先生追悼号として、まとまった一巻として発行することになったことは、まことに当を得たことと思います。

従来、追悼誌は門下生が中心となり、先生と親交の深かった方々のご意向を伺って御家族の御了承のもと準備を進めるのが常で、先生の御経歴、御業績、記念写真、著書・受賞の目録および関係者の思い出などをまとめるというやり方でありました。

蓑妻先生は後述するように官（逓信省、郵政省、文部省）、学（大学）、産（日立製作所）にお務めになり、広く国内外において御活躍され、御交際の範囲も多岐に渡っておられ、いろいろの立場の方々の御意見を集約するには時間がかかるなど困難であると思っていました。とにかく実行することが第一と思い、広く御意見を集めることは差し控えることも止むを得ないとして計画を進めたことに対し御了承を戴きたいと思っております。

蓑妻先生は大正5年（1916）9月28日山口県にお生まれになり、昭和16年（1941）京都帝国大学理学部地球物理学科を御卒業、海軍技術研究所（1942）、終戦後文部省電波物理研究所（電波研究所、現通信総合研究所）（1943～1948）で研究を行い、逓信省電波局（1948～）、電気通信省電波庁（1949）、電波監理総局電波部（1950）、郵政省電波監理局（1952～1964）と勤務されました。退職後は日立製作所（1965）に勤務、東海大学工学部（1966～1976）、東京農工大学工学部（1976～1980）で大学教育に専心され、その間東北大学工学部、東京工業大学、成蹊大学、東京理科大学の各講師として、電波工学、電波法を担当されました。

御経歴にありますように、先生は戦後の日本の混乱の時代に身を挺して活躍されたのであります。電波が軍から開放され、国際的な電波利用がスタートし、周波数利用とその開発研究が急速に発展し、電波行政の仕事は多岐に渡り、予想を超えた変遷が進みました。このすばらしい発展を支える分野に蓑妻先生は先頭に立って進む立場をとられました。当時（1949頃）「妨害電波対策に関する研究」が取り上げられていました。京都大学工学部の加藤信義教授が委員長の電気学会関西支部「妨害電波研究委員会」が活発な研究活動を行っていました。蓑妻先生は母校の加藤先生の研究にも協力されました。また戦後の国家警察の通信にも必要であるとして、抜山平一先生（東北大学教授、電波技術審議会会長）の「超短波通信研究」（1949～1951）の「雑音科会」委員長関英男先生、委員には蓑妻、瀧、佐藤などが働いたが、蓑妻先生は雑音測定器及び都市雑音測定を担当し、その開発を行いました。一方雑音問題はラジオのサービスに妨害するものとして注目され、「送配電線電波障害調査特別委員会」星合正治教授（東大）が全国電力会社の協力で大々的に研究調査が行われ（1948）、つづいて「電波障害防止対策委員会」山本勇教授（電通大）（1949）が産官学一体となって全国で実施された。この間電波技術審議会委員会には、浅見義弘（北大）永井健三（東北大）星合正治（東大）篠原卯吉（名大）金原淳（名大）山本勇（電通大）など当時の最高

の先生方が顔をならべ、専門委員に蓑妻先生などが居られたわけです。そしてその重要な案件は人口雑音の測定法、その許容値と防止対策でありました。大先生方は直接それを担当できないので、結局電波研、郵政省、NHK、大学などの方々にその仕事がまわり、その中心として働かれたのが蓑妻先生でした。

この分野の国際会議URSI (International Union of Radio Science) (1914～)、CISPR (International Special Committee on Radio Interference) (1934～) など多くがある。日本にも積極的に参加して世界情勢を知り、それに協力しなければならない。戦後の時代は復興に全力をだしているときであり、新しい技術を実験、調査し世界のレベルで挑戦することはとても出来ない状態であり、国際協力は不可能であった。CISPRは1934年に設立され、第1回はパリで開催され、妨害波の測定法、許容値を国際的に定めることを決定した。条件としては放送波の受信レベルを1mv/mに選び、SN比40dbを目標とした。第1回には日本は参加しないで、金原淳先生が1939年に出席したのが最初ようです。郵政省が担当であり、電波技術審議会第3部会にCISPR国内委員会を作って正式に対応しようとしたのが1972年であります。その委員長に蓑妻先生がなられてからCISPRの国際会議に日本も出席するようになった。1973年には蓑妻先生と遠藤幸男氏 (NHK) が代表で出席したが、そのときは郵政省の職員ではなく日立に転出されてからである。これからの後の事は本書に執筆される方々がくわしく報告されるであろう。

当時の大先生方と、次の世代の蓑妻先生を先頭としての先生方の努力は、欧米のCISPRの担当、関連の人々に負けないぐらいの活力があり、希望に満ちて、休むことなく頑張りました。その概要は1974年の電波監理局の報告書「電波技術審議会第3部会において答申された許容値及び行政措置に関する報告」に述べられていて、これは蓑妻先生の労作でもあります。

蓑妻先生は電波を愛情をもってみていたようです。何時ですか「電波はアンテナから飛び出したら勝手に行ってしまう、とても俺の云うことを聞いてくれない。」といていました。また大地にアースしますが「このアースというのも電気にとってよいのか、悪いのか、むつかしいね。」というのも口癖でした。ですから電波に対して無責任な発言をすると、こっぴどく注意されるのが常でした。

ここに示した写真は1972年EMCの研究会を作るための集まりがありました。大先生、小先生色々集まっています。ピンボケですがご覧頂ければ幸いです。先生も喜んで頂けるとおもいます。



前列右より松本正(北大)、金原淳(名大)、永井健三(東北大)、浅見義弘(北大)、大森忠夫(日立)、森本重武(元郵政省)
後列右より佐藤利三郎(東北大)、赤尾保男(名大)、一人おいて、蓑妻二三雄、瀧保夫(東大)、遠藤幸男(NHK)、喜多村
善一(阪大)、松本伍良(北大)、雨宮好文(国鉄)、堀内和夫(早稲田)、一人おいて池上文夫(京大)の各先生
NHK渋谷の寮で



電波環境行政と CISPR

郵政省電気通信局電波部電波環境課長
浅見 洋

■ 蓑妻先生との出会い、 CISPR国内事務局の担当

郵政省に入省しての3年目の1982年、当時の電波監理局技術調査課第三技術係に配属された。技術調査課は、電波技術審議会の取りまとめ、無線に関する技術調査等を担当していたが、第三技術係は、無線機器型式検定、都市雑音調査と電波技術審議会第三部会等を扱っていた。第三部会こそ、電波技術審議会で昭和25年以来、諮問第3号「国際無線障害特別委員会の諸規格について」の審議を行ってきた由緒ある部会である。蓑妻先生が当時からCISPR国内委員長をされていた。当時、既に蓑妻先生は、東北電波監理局長を退職して20年近く経過し、東京農工大教授も退職し、東京理科大学講師として活躍されていたが、入省まもない小生から見れば雲の上のような存在であった。CISPR審議会の当時の専門家は、宮島さん、遠藤さん、杉浦さん、黒沼さん、岡村さん、近田さんなどである。当時のCISPR活動といえばCISPR規格の国内規格化であるが、実際のところCISPR文書の翻訳作業がほとんどであった。分科会では宮島さん等と夜遅くまで翻訳を行い、訳が適当か真剣に議論したものである。時には英語版に疑義があり、フランス語までさかのぼって確認したりしたことがあった。訳語ひとつをめぐってこんなに熱心に議論する人がいることに驚きを感じたものである。当時でもCISPR総会には蓑妻先生はじめ数名が日本から出席していたが、1982年は、運営委員会がCISPR-Sとして正式にできたところである。

蓑妻先生は部会長ということで、作業の細かなところには参加していなかったが、部会での議論では雑音の権威者として発言には重みを感じられた。当時は、

電波技術審議会の一大イベントとしては3月に年1回の総会があり、すべての委員、専門委員が参加して郵政省講堂を使って開催された。蓑妻先生は、雑音、電波障害対策の重要性を説いていたのが印象的であった。

また、先生には、我々事務局メンバーを自宅に食事に招き労をねぎらうなどの機会を設けていただき、懇意にさせていただいたことが思いである。

■ 雑音と電波行政

蓑妻先生が郵政省（通信省）で活躍されていた昭和20年代は雑音特性の把握は電波の技術基準を策定する上に極めて重要な要素であった。

電波技術審議会で昭和25年から人工雑音の許容値、測定法、防止法等の審議が始まった。これは、当時開発が進んでいたVHF帯が自動車のイグニッションノイズ等の影響を受けることが知られており、円滑な受信環境を確保するために、電波伝搬特性を算出するうえで都市部の特性を知る必要があったためである。特に、昭和25年に制定された放送局の開設の根本的基準において中波放送局、超短波放送局、テレビジョン放送局の「放送区域」は、高雑音区域、中雑音区域、低雑音区域の区分に応じて郵政大臣が告示する値である区域と定義されている。また、昭和27年に策定された同告示では市町村別に高雑音、中雑音、低雑音の地域指定を行っている。例えばVHFテレビジョン放送の場合、東京中心部の15区は高雑音区域、他の8区は中雑音区域など全国の雑音区分が規定されている。放送局の送信規模を決める場合は、「放送区域」を必要十分な電

界強度でカバーするように置局する必要がある、電波伝搬を計算によって求める場合にも都市係数を考慮するよう定めている。このようにVHFテレビジョン、超短波放送では都市雑音を考慮して置局設計がされており、大都市ほど送信出力が大きいのはこの理由に基づく。特にFM放送局の場合、今でも東京を対象とする放送局の空中線電力が、横浜や千葉を対象とする放送局より大きく、結果的にサービスエリアの大きさの差異につながっていることは興味深い事例である。

雑音の調査と分析は、その後も継続して行われ、昭和30年代後半から実用化されたUHFの場合は、都市減衰、人工雑音の影響を受けにくいことがわかり、UHFテレビジョンの放送区域の設定にはVHFと異なり、高、中、低雑音区域の区分はない。

電波利用の主流がUHFからマイクロ波に移るにつれ、都市雑音、人工雑音による無線通信への影響は少なくなっているが、インバータ、デジタル機器の出現により高い周波数成分を持った漏洩電波や雑音源はむしろ増加する傾向にある。IMT2000、ITSなど1～10GHz帯の通信システムの実用化が間近になり、さらに電子レンジ等に用いられる2.4GHz帯を無線LANと共用するなど電波利用は高度化、多様化しており、雑音の実態を把握しておくことは引き続き重要であり、デジタル通信時代における無線通信への都市雑音の影響に関する調査を継続していく予定である。

CISPR活動への期待

郵政省のCISPR、電波環境行政の担当課は、組織の変遷とともに電波監理局技術調査課、電気通信局電波部技術管理室、電波部電波環境課と代わっている。ま

た、雑音については前述のとおり放送とも深く係わっており、放送行政局放送技術政策課もCISPR事務局の一翼を担ってきた。

昨年、電波環境課長を拝命し、久しぶりにCISPRを担当することになったが、杉浦さん、岡村さん等は今でも現役でCISPRに活躍していることに感銘を受けたところである。

携帯電話加入者の急速な増加、パソコンなど情報機器の普及によりITの進展が進み、今後、IMT2000、情報通信を駆使したITS（高度道路交通システム）等新システムが登場し、社会の情報化がますます進展していく。こうした中、電子機器の正常な動作を確保し、セキュリティに対する不安をなくし、安心、安全な電波環境の整備が求められている。このためには、不要な電波は出さない、電波を受けても誤動作しないという電磁環境（EMC）問題はますます重要になってくる。CISPRも従来からの自動車、電気鉄道、電力線からの雑音の防止だけでなく、情報技術機器、マルチメディア機器からの不要輻射の防止、イミューニティの確保といった新しい課題に取り組んでおり、特にマルチメディア関連装置については新しい小委員会が設けられたところである。

既に欧州ではEMC指令が出され、エミッション、イミューニティの規制が義務づけられており、EMCに関する産業界の関心も高まっているが、これらの規制の基礎をなすのがCISPR規格である。我が国としてもCISPR会議に多くの代表を送り、大きな寄与を行ってきているが、これも蓑妻先生が基礎を作っていただいたおかげと感謝しており、これからも、安心、安全な電磁環境作りのため郵政省としても努力していくが、CISPR関係者のますますの活躍と発展を期待するところである。



蓑妻先生の思い出

元・NHK総合技術研究所

遠藤 幸男

私が蓑妻先生から直接ご指導戴くことになったのは、1973年にウエストロングランチで開かれた第19回CISPR総会にご一緒させて頂いた時からです。以来20年余、多くのことを教えて頂きました。その中でも特に印象に残っているのは、はじめてCISPRに出席した時の思い出です。

1973年のはじめ頃だったと思います。当時の私の上司・沢村所長（NHK技研）から所長室に来るように連絡を受けました。直接指示されることはあまりなかった頃ですので、何事かと思って行ってみると、「蓑妻さんが来られて、CISPRに出席して欲しい」とのことでした。正直いって、私はもともとアンテナの育ちで、一時東京タワーにある芝テレビ放送所長に出て戻ったばかり。国際会議はもちろん、海外経験もなく、ためらいましたが、「蓑妻さんのご指導を受けて勉強して来いよ。」ということで、出席することになってしまいました。

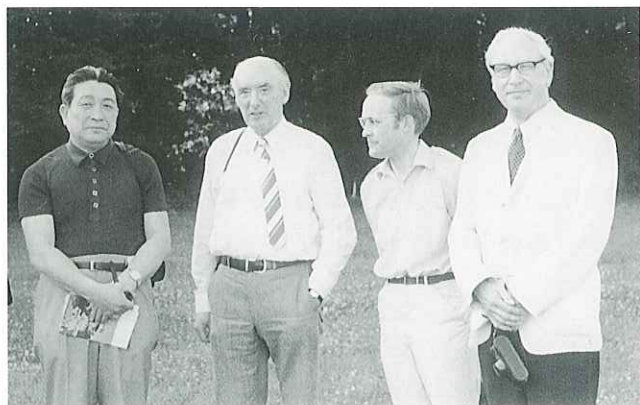
当時は、CISPR総会が3年に1回開催され、実質的審議は作業グループ（WG）で行われていました。わが国からは1964年の第16回総会に加藤氏（郵政省）、市原氏（NHK）が出席しましたが、第17回、第18回総会には出席しませんでしたので、9年ぶりの出席で

した。

総会の冒頭、議長のMr. Stumper（オランダ）は、「久しぶりの日本からの2名の参加を歓迎するとともに、今後さらにしばしば参加するよう要望する。」むねを述べられました。また、臨時総会が開かれて、CISPRの機構改革が審議され、従来の作業グループ（WG）を小委員会（SC）に昇格させて、合同小委員会を毎年開く現在の体制への改革が承認されました。その席上、蓑妻先生は、「近い将来、日本でSCを開催することについて、帰国したら当局に尋ねたい。」と発言されたように憶えております。

ウエストロングランチは、アメリカの大西洋岸にある静かな緑の多い市で、会場となったMonmouth Collegeは、1933年にhigh schoolとして設立された伝統のある私立大学でした。6月でしたので夏休みで学生はおらず、教室及び宿舎を提供頂いての会議でした。写真は、その校庭でバーベキューパーティーが開かれたときの、蓑妻先生とCISPR議長のMr. Stumper及びオランダ代表のかたがたです。蓑妻先生は以前からMr. Stumperと親交があり、CISPRの機構改革が行われて、小委員会が毎年開催されるようになることを察知しておられ、日本がそれに対応できるように強力に各方面に働きかけておられたと存じます。また、SCの日本での開催にふれた発言も、この時から1980年の東京会議の開催をにらんでおられたように思います。なお、臨時総会のあとで、SCの日本開催について、この程度の発言なら問題ないだろうとのことでした。

CISPRのあと、ニューヨークで開かれたIEEE主催のEMCシンポジウムにもご一緒させて頂きました。このシンポジウムでは、冒頭Mr. Stumperが“最近のCISPR活動について”講演されました。また、セッションは、“EMC system and planning”、“EMC



1973年 ウエストロングランチ会議にて

specification”、“Antenna and EMC”、“EMC measurement”、“EMC analysis”、“EMC Design”などと、EMC一色でした。私にとって、EMCとは何かを考えさせられたのは、この時からです。

帰国してからの報告書づくりは、CISPRの運営が実にしっかりしており、会議の翌日には red paper と green paper で審議結果と審議経過が配布されましたので、はじめての出席のわりには、なんとかまとめることができました。アメリカの国内委員会の委員長が軍出身の方で、軍関係の方が協力していたとのことでした。このときの paper は今でも記念に取ってあります。報告会では、蓑妻先生がご自分のスピーカーセットを持って来られて、総会でとった議長発言を聞かせながら、CISPRへの寄与の必要性を強調しておられた姿が、今でも目に浮かんで参ります。また、そのテープを持って、宮島さん、杉浦さんのおられた電波研究所にもご一緒しました。そして、1974年のロンドン会議には、宮島さん、岡村さんはじめ6名のかたがたが、合同小委員会に出席されて、わが国のCISPRへの対応体制ができあがって来たように思います。

その後、私もSC-E（受信機）の expert member に登録されたこともあって、CISPRの国内委員会などで教えて頂くことも多くなり、いろいろの思い出があります。

CISPRに参加したばかりの頃は、まず勉強といって出席すると、「WGに出席したら、単に情報を取るだけでなく、寄与すべきだ」などといわれて、苦勞することもありました。蓑妻先生は、「彼らが必要とするデータを取って寄与することからはじめよう」とおっしゃって、SC-D（内燃機関）の expert member にご自分がなられ、直接データのとりまとめをなさっておられました。

また、CISPR規格を取り入れようとする、それぞれの立場によって意見が異なることも多くあります。「CISPR規格は、一種の便宜的な約束ごと」という一面もあるとよく話されてました。はじめは、それを理解できないこともありましたが、CISPRと付き合いが永くなってくると、電波雑音の複雑さのために厳密に解明するに時間がかかることが多く、コンセンサスをとって標準化を進めるためには、現実的な考え方だと思えるようになりました。



1977年 ドブロブニク会議にて

1977年にはユーゴスラビアのドブロブニクで開かれた合同小委員会にもご一緒しました。ドブロブニクはアドリヤ海に面した実に静かな市で、当時は平和でした。写真は見学会でテレビ放送所に行った時のものですが、この時の会議の運営には、官と放送の方が大分係っていました。「CISPRは放送受信の保護からはじまった」など、その発展経過を教えて頂き実感することができました。また、今後のCISPRの動向や我々はどうすべきかなどの話もうかがいました。その頃、もう衛星放送のことは議題にのぼり、情報技術装置のことも水面下で動いていたと思います。

以上CISPRに関する思い出を述べましたが、振り返ってみると、私がはじめて蓑妻先生のお名前を知ったのは共立出版から出された「通信と雑音」でして、これが放送のチャンネルプラン策定に関する研究を通じてまとめられたことを、あとで知りました。また、電波技術審議会が妨害波測定器の国内規格をJRTC規格（わが国独自の規格）からCISPR規格への変更の審議をはじめたのは、蓑妻先生が第3部会のCISPR国内委員会委員長の時でした。そしてCISPRへの参加、CISPR東京会議の成功と、現在とは異なる産業優先の社会環境の中で、先見性をもって電波雑音、CISPR対策を推進されたことに対し、心から敬意を表したいと存じます。

私はNHKを卒業してからも、不要電波問題対策協議会、（社）日本電子機械工業会のEMC委員会などに関係しましたので、この分野に永くつき合うことができました。この間、元気で活躍される蓑妻先生のお姿を拝見できました。これもCISPRへの参加あってのことであり、そのご厚情に深く感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。



蓑妻先生の思い出

スタンレー電気株式会社

近田 隆愛

私の駆け出しの頃

私が先生に始めてお目にかかったのは、1954年から社団法人自動車技術会に先生の発議で設置された自動車電波雑音防止対策研究会においてであった。しかし、委員会の発足当時は私が二輪車メーカーに入社したばかりで、このような活動が始まっていることを知る由もなく、4～5年経った頃に国道1号線の大磯付近で行われた路上走行自動車の電波雑音測定に参加したのがこの分野にかかわり出した第一歩であって、そのときに委員長をされていた先生にご挨拶した筈であるが、大勢が参加されていたのではっきりとした記憶はない。この委員会は、始めての人のために電波雑音測定法の講習からスタートし、先生からFM放送、TV放送の開始に先駆けて研究された成果に基づいたご指導が行われたとのことであるが、これに参加できなかったのは今でも心残りに思っている。

その後は、このような集まりが実施される度に参加協力して経験を重ね、その結果1969年から電波技術審議会の電波雑音委員会に二輪自動車の代表として参画するようになり、JRTCの諮問・答申対応の作業を通じて直接に先生のご教示ご指導をいただくことになった。特に業界の立場からの発言に対して、論理的又は他分野との関連でのご指摘を度々いただいたことは誠に得難い経験であった。

CISPR活動を通じて

1973年のCISPR会議に先生が初参加され、CISPRへの取り組みが必要であるとの方針が確立されたことか

ら、関連組織・業界を挙げての協力体制が整えられてそれぞれの活動が始まったが、当時の自動車業界の公害対応は排気ガスがトップ、2番目に騒音問題で電波障害への関心は余り高いとは言えなかった。このため、自動車に関するCISPR会議対処方針が電技審CISPR委員会で決定しても、日本からそれを携えて参加するのではなく、業界の現地駐在員が出席する方法での対応が行われた。したがって、CISPR/D及びそのWGの会議は、対応を先生に全面的にお願いするという状態が続いて、大きな負担をおかけしていた。

このような状態を解決するため1981年に自動車関係4団体の代表が集まって協議を重ね、国際標準化の一環であるから自動車規格事業の母体である自動車技術会が担当すべきであると合意され、自動車技術会規格会議の中にCISPR分科会が新設された。このとき、分科会長を先生にお願いしたところ委員としての参加のほうに自由に発言できて楽しいと固辞され、お亡くなる直前まで16年にわたってほとんど休まれることなくご出席いただき貴重なご意見を賜った。また、このように対応体制が確立したことから、1985年のシドニー会議以降先生が体調を崩されて海外渡航を見合わされるようになるまで10年間にわたって先生と業界代表のペアでの会議参加が行われた。

先生は自動車電波雑音問題の開拓者であり、急速に発展したエレクトロニクス技術にも優れた理解を示され、特に自動車への応用に関して卓越した見識をもっておられたので、CISPR/D及びそのWGでは、議長始め各国代表・エキスパートから尊敬されていて、何かにつけてProfessor Minozumaと指名があり、その都度適切な意見を述べられていた。このため、先生と一緒にいるときは記録に専念すればよく、会議のしきたり、進め方、重要案件への取り組み手法など十分に習得さ

せていただいた。先生が出席されなくなってもどうか対応が続けられるのは、先生のご指導の賜物と深く感謝している次第である。写真は、1992年ワルシャワ会議のときのもので先生の会議でのご活躍が如実に示されている。

なお、先生は時々奥様を同伴されたが、そのときは市街案内又は電話帳のイエローページで日本料理店、中華料理店を探して滞在中にご一緒した。どちらかと言うと大衆的な店が多かったが、選択についてはいつも好評をいただいていた。特に印象に残っているのはロッテルダム会議のときで、CISPR/Dが終わった後CISPR/S（運営委員会）に出席されるため先生は4～5日待機されることになったので、この期間を利用しての近辺観光を計画し、私の会社の駐在員がブラッセルに事務所を構えていたことから自動車での案内を頼み2泊3日のベルギー小旅行を実施した。ブラッセル、ブリュージュ、オステンド、ゲント、アントワープなどをご案内したがブリュージュの運河クルーズ、オステンドの海岸風景など特に印象に残られたご様子であった。また、随所で奥様と買い物を楽しんで居られ羨ましい限りであった。この他、コペンハーゲン、ベルリン、ワルシャワ、北京でも心に残る懇談があり、帰国後に報告書をまとめ確認をいただきにお宅へ伺ったときなど、思い出話に花を咲かせたものである。

北京会議（1994年）のときは、往復の飛行機をご一緒したが特に帰りのときに疲れが溜まっているように見受けられ、その後1ヶ月位でクモ膜下出血で倒れた。その時は奇跡的に全快されたが、退院の後は大事を取られて遠出をなさらないようになったためCISPR/Dは先生のご参加なしの対応となり、会議中は勿論、合間の時間がもの足りなく感じられご健在のときが懐かしく思い出される。

自動車に関する学会活動

先生は広い範囲の学術分野で活躍され、アメリカIEEEのフェロー会員に推戴されるなど電気・電子関係では有名な存在で居られたが、自動車の分野も電波雑音に取り組まれた関係で強い関心をもたれ、電波雑音研究の委員会が完了された後も自動車技術会の学術

活動（技術会議）に参加され、更に規格会議にも参画されて自動車規格の審議制定にも指導力を発揮された。自動車技術会の記録から先生の主なご経歴を拝見したところ次の表のとおりであった。

自動車技術会での義妻先生の主なご経歴

役員会評議員	1978～1984年
技術会議委員	1962～1983年
(技)電波雑音防止研究委員会委員長	1954～1970年
(技)エレクトロニクス部門委員会委員長	1972～1984年
(技)エレクトロニクス部門委員会委員	1985～1999年
規格会議規格委員会委員	1984～1999年
(規)電装部会部会長	1978～1988年
(規)電装部会委員	1989～1999年
(規)CISPR分科会委員	1983～1999年

注) (技)は技術会議を、(規)は規格会議を示す。

私は規格会議の仕事を通じてご指導いただいていたので、技術会議でのご様子は人伝えに聞くだけであったが、エレクトロニクス部門委員会は、4ビットのマイクロプロセッサが1個10万円の時代に先生が自動車への電子応用が必須となることをいち早く提言され、そんな高価なものは自動車に使用できないと猛烈な反対があったのを、量産化されれば二ケタは安くなると説得してようやく設置されたとのことであった。この委員会での成果で印象深いのは、国際規格（ISO）に20年近くも先行して自動車用電子装置の環境条件に対する試験データを系統的に集められたことで、いろいろな立場の委員が参加しての作業のため意見一致に手間取るときなど、かなり厳しいご意見の表明があったと伺っている。このときの集計結果は、その後規格会議側に渡され、やはり先生ご指導の下に自動車規格JASO D 001-1978となって制定されたが、わが国の自動車用電子装置の開発発展に大きく貢献した。また、規格会議のCISPR分科会設置では、その頃に活動を開始した自動車とその電子装置に対する電氣的妨害の試験法規格を作成するISO/TC22/SC3/WG3への参加をお願いし、ご高齢に関わらず10年近くも欠かさずご出席され自動車EMC試験規格の確立に際して我が国の意見を含めてご努力下さった。この他、自動車規格全般に関して、ややもすると業界中心の見方に偏りがちな運営に対し中立学識者としての貴重なご指摘を適宜に表明され、関係者が感銘を受けることが多かった。



菱妻先生と筆者（1992年 ワルシャワ会議）

先生が、広く普及した自動車エレクトロニクスの先行きを心配されるようになったのは、大きく体調を崩される少し前のことで、その頃自動車技術便覧からエレクトロニクスの章が消えたことに注目され、それまで関係者の努力で排気ガス及び省エネ対応・各種制御システム導入などでエレクトロニクス全盛になったが20年も経つとマンネリ化し自動車の部品に位置つけられたものと嘆いておられた。しかし、先生の本領はそれからで、自動車の本質がエレクトロニクスの導入によって変化しなかったとあきらめないで、第2の狂気を発揮する必要があると強調され運転者の要らないスマ

ートビークルの開発に向かうべきとの提案と、この制御系の研究のためファジィ、カオス、ニューロなどを論じ哲学的とも言える見解を1992～3年頃に数多くまとめておられた。更に温故知新の一つとしての易（占い）の研究をされ、コンピュータとの結びつきなどを調べられていた。ITS、マルチメディアなど電子応用の技術が益々高度化する現在に先生から適切なお助言、ご指導いただけないのが誠に残念であり、ご活躍されていた頃のマドロスパイプを愛用されていたお姿が懐かしく思い出され、お世話になった者として一層の努力をしなければならないと反省している。



蓑妻先生との出会い、そして

(財) 日本品質保証機構
旧 (財) 機械電子検査検定協会
岡村 万春夫

蓑妻先生との出会い

1973年12月であったと記憶している。当時、電波無反射室の建設に関心のあった蓑妻先生はE&C社のEmerson氏を同伴し、当協会の世田谷の試験所を訪問されている。その晩、先生及びEmerson氏と横浜のレストランにて楽しい一時を過ごす機会を得た。この席上、先生から1974年のCISPRロンドン会議への出席打診があった。

過去に国際会議出席の経験は皆無であり、自信も無く最後まで躊躇していたために、ロンドンで宿泊したホテルはランカスター街の外れのペンションであり、毎日、会議終了後には、電波研究所の宮島さん（当時、標準測定研究室長）のホテルに立ち寄りお世話になった。この会議には蓑妻先生は出席しておらず、CISPR会議で一緒したのは1975年のモントルー（スイス）会議であった。この会議ではEMCシンポジウムが同時開催され、蓑妻先生が「我が国のEMC規制の状況」について講演を行っている。当時の先生の印象は「恐い先生」の一語に尽きる。EMCシンポジウムに製品を展示するために、この地を訪れた協立電子の藤井社長と諍いがあり、彼を帰国させようかと相談を持ち掛けられた時には些か当惑し、驚きもした。

一人のメンバーとして 蓑妻先生

1979年のCISPR会議はオランダのハーグで開催された。このハーグ会議以前には郵政省から、宮島さん、村主さんが出席した経緯はあるが、あくまでも電気通

信技術審議会の1メンバーとしての参加であった。この会議から実務者としての杉浦さんが郵政省の代表として参加している。当時、ISM装置のグループ分類問題（電磁波を放射することによって材料の処理を行う装置と導体を介して装置の内部機能を行わせる装置）、及び情報処理装置及び電子事務機（この時点では、情報技術装置と呼ばれていなかった）のクラス分け（住宅環境と工業環境）に関連する議論が盛んであり、これに関連する平均値検波機能をCISPR 16で明確にするための議論が行われていた。この議論は英国電波庁のWhitehouse氏の主張と我が国の主張が対立する形で議論が進められることになり、蓑妻先生と杉浦さんとの間にも意見の相違が見られた。それ以後、蓑妻先生はD小委員会のエキスパートとしての立場を鮮明にし、更に、我が国にCISPR会議を招聘するとための努力と共に、CISPR Steering Committeeのメンバーとしての活動の場に身を置くことになる。



ウエルカム・パーティでの蓑妻先生
(1979年 ハーグ会議)

G小委員会の幹事国を 日本に

「情報処理装置及び電子事務用機器」は、当初、CISPRのSteering Committeeの特別作業班として審議が進められていたが「内部に無線周波エネルギー源を内蔵する装置」であるとの判断からB小委員会に審議が委ねられていた。しかし、今後の技術革新に対応すべきであるとの米国の主張により「情報技術装置」と名称が変更になり、新たにG小委員会を設立することが発表された。Steering Committeeによるこの決定に逸早く蓑妻先生が反応し、我が国でこの新しい小委員会の幹事を引き受けるためのロビー活動を開始した。その後の情報技術装置の利用面での多様化から判断して、確かに優れた嗅覚をお持ちの先生であったが、既に、欧州勢と米国の間には密約があり、ドイツが幹事国、英国が議長を引き受けるとの約束が成立していたものと思われる。

この間、蓑妻先生は、CISPRの主要メンバーに手紙を送り、更に、国内的にも足場を固めるための努力を精力的に行ってきたと思える。欧州勢は事務用機器としての将来を、米国勢は情報分野でのコンピュータの将来を念頭に置きながら激しい幹事国争奪合戦に駒を進めている時代であった。蓑妻先生が当時のNTTに協力を仰いだ背景には、米国と同様な将来像を描いていたのかも知れないと判断することができる。行政官経験者の面目躍如である。

このような蓑妻先生の志向は必ずしもCISPRの主要メンバーの支持が得られず、残念な結果になってしまった。その後はB小委員会（後のG小委員会）にも出席せず、ひたすら、近田さん、結城さん（勿論、SC-Aのエキスパート結城さんにはA小委員会への出

席の義務は課されていたが）と共にD小委員会に活動の場を見出していたものと思われる。

CISPR東京会議開催に 向けて

CISPR会議の日本招聘に向けて、正式な招聘の英文手紙を作成するよう蓑妻先生に依頼されたことがあった。「CISPRの要請に基づき、我が国は.....」で始まる文書に対して、蓑妻先生から「実は、CISPRからの要請ではなく、日本が開催の提案をする」と内容を変更して欲しいとのことであった。その後、この種の依頼を受けた記憶はない。

このCISPR東京会議成功に向けての蓑妻先生の努力は大変なものがあった。引くところは引き、押すところは押すの柔軟な態度で東京会議開催に漕ぎ着けた。主体を通産省工業技術院に預け、郵政省の諸先輩に頭を下げ、ウエルカム・パーティでは、我が国のCISPR会議出席者全員の紹介を行う等の「気遣い」、この上なかった。

何れにしても、我が国におけるEMC活動を正式に舞台に乗せ、関係者の総意を取り付けた功績は評価されるべきものがある。

更に、晩年にはCISPRは特定の人たちのものではなく、業界の協力が必要であるとの判断から、電気通信技術審議会下部組織として、AからGまでの検討会を各関連業界に組織するための努力を払っている。

これらの蓑妻先生の努力には敬服の念を禁じ得ない。

最後に蓑妻先生のご冥福を祈り、筆を置くことにする。



蓑妻先生を懐う

元・（財）電力中央研究所

澤田 嘉嗣

プロローグ

私は電力中央研究所に勤務し、そのほとんどを架空送電線から発生する放電に起因する電波障害雑音の研究業務に携わっておりました。そのせいでしょうか、雑音分野の大家というべき蓑妻先生のことにつきましては、常に身近に感じておりました。ですが、先生のことについて何か書けと言われて、私は何のためらいもなくイエスと言ってしまい、いざ書くとなつて、その材料の乏しいのに歯がゆい思いをしております。先生には何度かご指導戴き、めんどろを見て戴いたことはあったのですが、深くお話をさせて戴いたとか、行動を共にさせて戴いたとかが、ほとんど無かったからです。しかし、私にとりましては、先生は、陰に陽に、雑音の大先生であり、大恩人であり、良き指導者であったと思います。

先生はどんな人だった、と聞かれれば、酒好きで健啖家で、時にはやんちゃ坊主のようで、明朗闊達で、周囲に対する気配りが良く、常に高い目標を掲げ追求し、公の立場を良く心得、国際的に活躍された人であった、と応えることになるのでしょうか。

皆様方の琴線に触れるに至るような思い出話になりそうありませんが、ささやかながら先生に対する追悼文を綴らせて戴き、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

先生との出会い

蓑妻先生に初めてお目にかかったのは、富士山の裾野の御殿場であったと思います。もう四十有余年も前

のことですので、記憶は定かではありません。私が電力中央研究所に職を得て、架空送電線のコロナ放電に基づくラジオ障害雑音の研究に従事するようになって、間もなくのことでした。当時、最高の送電電圧275kVであった佐久間東幹線が富士山の裾野を通過しており、ここは広がった大地があるだけで、送電線の雑音を測定するのに良い場所でした。その測定がどうであったかは全くおぼえておりませんし、また何一つ資料も残っておりません。御殿場の木賃宿の薄暗い部屋で、酒食を共にさせて戴いたのが、先生との出会いの最初でした。当時、先生は電波監理局におられたと思います。

CISPR会議への初参加

私が先生との接触の機会が多かったのはCISPRに関する問題、活動でありました。当時、CISPRに対し私はほとんど関心がなかったのですが、蓑妻先生に担ぎ出されて関心を持つようになりました。そして、何回かCISPRの会議に出席しました。いろんな国の都市に行くことができ、いろんな人々と接触することができ、楽しい思いをしましたことは、これは一重に先生のお蔭と懐かしく振り返っております。

私が初めてCISPRの会議に参加したのは、当時、東欧諸国の中で唯一西側に理解を示していたチトー大統領のユーゴスラビアでした。アドリア海に面したドブロブニクという城壁に囲まれた古き佳き街でした。その街の郊外といいますか、海に近いアメリカ人が多く来るといふ保養地で会議は行われました。丁度その頃、日本のあちこちで、城壁に囲まれた歴史的な美しい何処かの街の風景写真が飾られていました。カレン

ダーの風景写真にも採用されていました。それは大変に印象的な美しい街の風景でした。ドブロブニクに着いて、空港から街へ向かうバスの中から、何と、その街の風景が見えたのです。何処かも全く知らなかった印象的なあの街の写真そのままの風景を現実目の前にしたとき、ひどく感激したのを昨日のこのように覚えています。

そのドブロブニクで、私が関係しましたCISPR/C小委員会において、大きな問題が議論されました。それは、架空送電線から発生するAMラジオ放送波に影響する雑音の許容値を絶対値で決めたい、という提案に対する審議でした。当時、ヨーロッパでは、送電線から発生する雑音の絶対的な許容値を決めたがっている国が多かったのです。その一つの大きな根拠は、ヨーロッパ大陸では国間で送電線が連系されることがあり、隣国の雑音を送電線を伝搬して自国に侵入してくるような場合、それを抑制するには許容値を絶対値で決めるのが最善と考えられたからのようです。CISPRのメンバーはヨーロッパの国の人間が多くを占めておりましたので、絶対値を歓迎する意見が支持されていたようです。

議論は紛糾し、絶対値が良いというのと、信号対雑音比が良いというのとに別れ、夜遅くまで2日間に渡って議論されました。そして、絶対値で決める決めないがフィフティー・フィフティーで決着が付きませんでした。最後に、CISPRのプレジデントが登場して、許容値は決めないで、許容値を決める方法を示唆するものとし、それに従って各国で許容値を決めればよい、ということが結論となりました。そして、その後の作業はその方向で文書をまとめたのでした。

SN比20dB

当時、日本では、既に、送電線からの雑音によるラジオ受信障害を起こさないようにするために、ラジオ放送波信号と送電線雑音との比、すなわちSN比20dBを確保することを目標としていました。これはあくまでも目標値で、苦情があれば十分な対策を講じることになっていました。ところが、このSN比20dBの根拠が、一体何処で誰が何に基づいて決めたのか、

よく分からなかったのです。決めるに至った根拠となる資料は何もありませんでした。

SN比20dBを決めたのは、蓑妻先生でした。昭和30年代初期に、電気学会に送配電線電波障害調査特別委員会が組織されて、当局をはじめ、学識経験者、大学、研究機関、電力会社、メーカなどが参加し、送配電線、電力用機器などから発生する放電に起因する雑音に関する全国的な調査試験研究が大々的に行われたのでした。その委員会において決められたSN比だったのです。先生の話によりますと、NHKの代表者と電力会社の代表者と話し合っ、決めた値だとのことでした。

私はこの値がどのようなものなのかを明らかにするために、ラジオ放送波と送電線の雑音との種々のSN比に関する聴取実験を行いました。その結果、SN比20dBとは、50%の人が満足する値であることが分かりました。20dBを決められたときには、何もデータが無かったにもかかわらず、大変に合理的な値が選定されたものであると驚きました。

ノーコメント

CISPRの会議において、その場で意見をまとめ、決めようとするのが、たびたびありました。そのようなときに意見を求められたら、どのように返答するのかについて、気になっておりました。また、いざ決めるときになって、賛否を問われたら、どう対応するのかでした。このことについて、先生は「ノーコメント」と返答しろと言われたのです。事実、先生が私の関係するC小委員会に出席されていた時、たまたま日本の意見を問われたことがありました。その時、先生は両手を広げ、肩をすくませるようにして「ノーコメント」と返事をされたのでした。私は、それを見て、これだなと思い、その後大いに気が楽になりました。国際的な物事の取決めの場において、国の意見として、まとまっていない事については、個人的な発言はするな、ということでした。えてして人は、自分の意見を皆の意見のような顔をして発言しがちですが、立場を良く考えて、ものを言え、と言うことでしょうか。「ノーコメント」を知ってからは、CISPRの会議に、ゆとりを持って出られるようになりました。

エピローグ

1980年のCISPR東京会議は、蓑妻先生の努力の現れであり、先生の一つの大きな晴れ舞台であったと思います。この東京会議は、日本のCISPRに対する熱意を世界に表明し、日本の立場を確固たるものとし、意見を通りやすくすると共に、日本の関係各位にもCISPR対応の重要性を広く知らしめたものと思います。私の関係していた電力会社の人達も、地元であるために、大勢出席することができ、会議の重要さ、そして会議

への十分な対応の必要性を良く理解して戴くことができました。

CISPRに対する日本の対応に関し、ひたすら努力されました先生の苦勞が着々と実り、すっかり軌道に乗り、国際社会の重要なメンバーとして日本のCISPR関係機関が順調に機能しておりますことは、先生の残された大きな業績であります。私たちは、いつまでも、この先生の偉大なる業績を語り伝え、CISPRに対する日本の貢献度を益々高めていくべきであると思います。

〔編集担当より〕

本追悼号には、長らく電波技術審議会第3部会で蓑妻先生を遠藤幸男さんと共に補佐され、電気通信技術審議会CISPR委員会では蓑妻委員長の代理を勤めてこられた宮島貞光様（元、郵政省電波研究所通信機器部長）にも御寄稿を御願い致しましたが、今年の始めから体調を壊された御様子で、残念ながら御執筆戴けませんでした。本追悼号の編集を手伝って戴いた杉浦さん宛に宮島様より御手紙を戴きましたので、それを抜粋して以下に掲載させて戴きます。

宮島様の御全快を心からお祈り申し上げます。



「蓑妻先生追悼号の原稿執筆の御依頼があり、その作成にとりかかろうとしたのですが、その後、思いの外体調が良ならず、毎日、頭痛頭重またはめまいなどに悩まされて来ました。……この状態では原稿作成はとても出来そうにありませんし、このような勝れない体調で書いたものでは。かえって亡き蓑妻先生に申し訳ないものしか出来ないと思い、改めて執筆者のメンバーから外していただきたく、御願い申し上げます。……事務局から送られて

来た執筆者のメンバーを見ますと、昔、共に苦勞して電技審第3部会やCISPR委員会を先生の御指導の下に支えるべく努力した日々が懐かしく思い出され、この方々なら先生を偲べるよい追悼号が出来ることと信じております。……」



CISPR会議にご一緒に

能美防災株式会社（元・日本放送協会）

黒 沼 弘

1966年頃、先生は自動車から発生する電波雑音の低減に関して業界を熱心にご指導されており、自動車技術会の自動車電波雑音研究委員会の委員長をされていました。私が蓑妻先生に初めてお会いしたのは、その会議に私が初めて出席したときでした。

NHKに勤務していた私は、1965年に技術研究所に転勤になって無線研究部に配属され、電波雑音防止の研究を担当していました。そこでの初めての仕事が、当時、テレビ受信への最大の妨害源であった自動車から発生する電波雑音を低減するための自動車用雑音防止器の研究でした。その関係で、研究所の上司に連れられて上記の委員会に出席し、先生に紹介されました。“郵政省で電波管理局長まで務められた偉い方だよ”と云われ、30歳前の若造だった私は、ご挨拶の言葉だけで引き下がったことを覚えております。

その後何年かの間、同委員会の会議に出席するようになり、電波雑音の低減とか、規格の作成とかに関してもすれば消極的になりがちなメーカーの人達を、先生が引っ張っていかれる様子を見させて頂き、勉強をさせて頂きました。また、先生が委員をされていた電波技術審議会の第3部会（電波雑音を担当）にも、雑音障害の実験や報告の取りまとめなどのお手伝いをするようになりましたが、その頃の私について先生の記憶の中にどの程度残っていたかは疑問です。

私が蓑妻先生にもっとお近づきになれたのは、私がCISPR会議に出席するようになってからです。日本の代表がCISPR会議に本格的に参加し始めたのが1973年からであることは、電波雑音およびその規格に関係される方々であればよくご存知のことです。そして、その1973年の日本の代表が蓑妻先生とNHKで私の上司であった遠藤幸男さんであったこともご存知と思います。それ以後、先生はほとんど全てのCISPR会議に出

席されていらっしゃいますが、NHKからも毎回会議に代表を送るようになり、それを何人かの人間が交代で担当することになりました。

私が初めてCISPR会議に出席したのは1975年のモントルー（スイス）会議でした。その頃の日本からの参加者は蓑妻先生を除いてほとんどが国際会議への参加の経験が浅い人達でした。したがって、常に先生が中心になって自然と他の人達が集まり、情報交換・意見交換をするというような感じでした。先生も周りの人達に色々と気を配っておられ、周りが若い（経験の浅い）者ばかりでご苦労も多かったのではないかと思います。

私が電波雑音に関わった最初の仕事が自動車雑音の低減であったことから、CISPR会議に参加した初期の頃には、自動車雑音を扱うD小委員会に先生や自動車関連業界の方と一緒に私も出席しておりました。日本からはこの小委員会あるいはWGに、先生が業界をせっついて纏めた技術的な資料を多く出していました。このような技術資料を提出することでCISPRでの日本の評価を高め、その後の討論に良い影響をもたらしたと思います。CISPR会議における討論は（特に専門家の会議であるWGでは）、議題によってはその内容に関心のある主だった数人の間で議論が進められ、そのまま結論が出されてしまうことも多いのですが、D小委員会の議論が白熱化してくると、“Prof. Minozumaはどう思うか”などと突然の質問が先生のところに飛んでくることもあり、先生がこの分野における権威の一人であると認められていることを、あらためて納得させられた場面もありました。

初めて外国に出かけ、国際会議に出席するという責任ある仕事を託された場で、経験豊富な先生から、会議に参加するときの心構え等、さまざまな事を教えて

頂きました。初めての外国での仕事を無事勤めることが出来たのは先生のお蔭と、感謝しております。

仕事を離れては、会議の間の日曜日に、スイスの山にドライブに行くから一緒に行かないか、と先生に誘われ、何人かでお伴したことも懐かしい思い出です。目的地におけるケーブルのふもと駅周辺のスケールの大きさや、ケーブルを乗り継いでシルトホーンという山まで行き、そこから眺めたスイス・アルプスの雄大な景色は、初めて外国に行った私にとって忘れられない風景になりました。ドライブの途中の昼食時には、お酒が飲めない同行の者を尻目に、たった一人のドライバーである先生だけがビールをおいしそうに飲んでおられたことも忘れられません。当時のスイスは飲酒運転に対してそれほど厳しくなかったのでしょうか。それ以来、外国ではお酒が飲めないと楽しさが半減すると痛感し、お酒に強くなるよう心がけています。

帰国した後も、もう一つ思い出があります。会議の報告書作成を若造たちに任せてはおけないと思われたのかも知れませんが、報告書作成のため執筆者をかんづめにして纏めをやろうとの提案があり、一夜の合宿を行いました。箱根に宿を取り、朝から夕方まで、報告書原案の読み合わせ、内容の確認・修正などの作業を盛り沢山にこなしました。その夜は宿泊、翌日はゴルフと、今では考えられないやり方で報告書を纏めたことを、全くの初心者であったゴルフにお付き合いしたことも含めて、懐かしく思い出します。当時のゴルフの腕は、初心者というより全く経験がないといった方が良いでしょうが、現在、月に1度位はコースに出ていることにつながっているのかと思えば、先生の影響は大きかった??と云えるかも知れません。

2 回目に出席した1979年のCISPRハーグ会議の際には、CISPR会議に先立って同じオランダのロッテルダムで開催されたEMCシンポジウムに、蓑妻先生を始め、CISPR会議の出席者の多くが参加しました。ここで掲載しました写真は、そのEMCシンポジウムの会場で撮ったものです。蓑妻先生を中心に、当時、東北大学の教授であった高木先生（電通議審・CISPR委員会の前委員長）や郵政省・電波研究所の杉浦さん（現在・東北大学教授）等の顔が若々しく写っている懐かしい写真です。4年に1回ヨーロッパで開催されるこのEMCシンポジウムには、蓑妻先生も組織委員会に

名を連ね、運営に協力されたとお聞きしています。若輩の私は、先生の若い頃のご活躍については周囲の方からお聞きするだけですが、まさに、日本のEMCに関する分野で、真っ先に世界に名が知られていった方ではないのでしょうか。

この年は、翌1980年にCISPR会議を日本に招聘するために日本が本格的に運動をした年でした。運動の中心は勿論、蓑妻先生で、運営委員会に出席されて日本の意向を伝え、招聘が実現しました。これは、単にこの運営委員会での説明だけでなく、それまでの先生とCISPR幹部との交流の効果が大きかったのではないかと思います。

私はその後1991年の北京会議まで、17年の間に11回のCISPR会議に出席させて頂きましたが、そのときは全て先生とご一緒でした。会議の回を重ねるにつれて、日本からの会議参加者数も増えたかわりに、会議の一部にのみ出席してその前後には現地から離れる人も増え、出席者全員が一緒に顔を合わせることも少なくなってきました。また出席する多くの人が経験を積むにしたがって、先生から直接ご指導を受けることは少なくなりましたが、それでも先生の存在は大きく、会議に参加された方の多くが無言のうちに先生の教えを感じとっていたように思います。

私はCISPR会議への出席という機会を与えられたお蔭で、先生に近く接することが出来ました。親しくお付き合い頂いたというのはおこがましく、近くにいる機会があったことで先生から色々と教えて頂けたというのが本当のところではあります。あらためて先生に感謝したいと思います。先生、本当に有難うございました。



1979年のEMCシンポジウム会場での蓑妻先生
(左から杉浦さん、一人おいて高木先生、蓑妻先生、黒沼)



我が国CISPRの産みの親

東北大学電気通信研究所

杉 浦 行

蓑妻先生の思い出を書くにあたり、私自身の経験や昔の我が国のCISPR活動についても記します。

お偉いさん

蓑妻先生に初めてお目にかかったのは、私が1968年に郵政省電波研究所（現、通信総合研究所）に入所し、人工衛星の研究をしていた頃です。電離層観測衛星の受注に絡んで、日立製作所に勤められていた先生が技術者を連れて研究所内を挨拶回りされていた時、先輩が「あの人は、東北の監理局長をやっていた“お偉いさん”よ」と私に説明してくれました。勿論、私は末席ですから、先生とお話をする機会は有りませんでした。が、社会人1年生にとって、先生が非常に“エラそう”に見えました。先生は郵政省電波監理局の陸上課長から地方監理局局長へと当時の出世コースを歩まれましたから、役人が威張っていた時代の雰囲気が残っており、その手法に長けておられたようです。でも、この役人としての豊かな経験や実績があったからこそ、蓑妻先生が我が国のCISPR組織作りを行い、国際会議における我が国の立場の向上に努められたのだと思います。生粋の大学人には真似ができないほど、先見の明があり、熱心に、場合によっては強引に物事を進められました。

CISPR国内体制固め

1969年に宇宙開発事業団が設立されたため、私は宮島貞光さんが室長をやっておられた標準測定研究室の御世話になることになりました。この研究室は、

CISPR規格妨害波測定器の研究を行っていたので、私もこのプロジェクトに1970年頃から参加し、初めて“シスプル”を知りました。当時、我が国は、蓑妻先生等の御研究に基づく独自の妨害波測定器を使用していましたが、貿易が盛んになると共に、国際的なCISPR規格に基づく妨害波測定器の導入が不可避になってきました。このため、宮島さんの研究室では、電波技術審議会の要請を受けて、CISPR規格（現CISPR 16-1）に基づく妨害波測定器の研究を行っていました。従って、私は審議会の作業班会議などで発表する機会がありましたが、蓑妻先生から言葉を掛けられた記憶はありません。当時の先生は“威厳があり非常に怖い”天皇的な存在でした。その後、審議会では、蓑妻先生の指導の下に、1971年頃からCISPR規格の国内導入を順次始めました。このように、先生の見識性と指導力によって、CISPR規格の測定法と許容値は我が国に浸透し、審議団体として電波技術審議会第3部会が確立しました。そこで、先生の次の目標は、我が国の代表がCISPR会議に参加することだったと思います。

CISPR会議に参加

日本が本格的にCISPR会議に参加し始めたのは、1973年の米国ウエストロングブランチ会議で、この会議に参加された蓑妻先生は、CISPR規格が重要であることを強く認識されたようです。帰国後、先生はNHKの遠藤幸男さんと電波研究所に来られ、我々にCISPR会議の話を熱心にされました。でも、妨害波測定器を研究していた私ですら、CISPR会議の話は全く他人事でしたから、工業会などを説明に回られた先生は、恐らく苦労が多かっただろうと思います。それで

も、翌年から宮島さんを含めて6~7名の方が参加されました。その後、産業界も積極的になり、CISPR会議の参加者は徐々に増え、昨今では常時20名以上が参加するようになりました。

1979年に私は宮島さんの代わりに急にオランダ・ハーグ会議に出席することになりました。出発までの約1ヶ月間、担当するSC-A（測定器）とSC-F（家庭用電気機器）の多数の文書をコピーし、それを読むのが大変でした。また、我が国は新参者でしたから、CISPRに何らかの貢献をしなければならないとの意気込みがあり、2編の寄与文書を持参して会議で発表しました。しかし、私は外国が初めてで、英語で発表するのも初めてでしたから、事前に岡村さんに英語のチェックを受けたにも拘わらず、上がりっぱなしで散々でした。でも、この会議で初めて蓑妻先生とお話をする機会を得ました。その時の写真が写真1です。

CISPR会議は2週間続き、同時に2つのSC（Sub-Committee）を開きますから、蓑妻先生を始めとして、我が国の殆どの参加者は毎日どれかの会議に出ていました。また、夜になると先生の部屋に集まり、その日の会議の報告を行い、御意見を伺いました。従って、

土日を除いて、息を抜く暇は殆ど有りませんでした。また、帰国後、全員が会社の寮に1泊して報告書をまとめました。このような習慣は1985年頃まで続いたと思います。その頃になると、参加者もベテランになり、先生が気配りをしなくても良くなったからです。従って、先生は自動車関連のSC-Dだけに出席されました。また、写真2のように、奥様同伴で外国に来られ、暇なときはゴルフなどして楽しまれました。従って、私が蓑妻先生から直に薫陶を受けたのは、1985年頃迄です。その後は、先生のお相手をスタンレーの近田さんやNTTの結城さんに任せて、私と岡村さんは何時も逃げ回っていました。

我が国の地位の向上

CISPR会議に対する国内体制がほぼ固まった1980年に、先生はCISPR会議を東京で開催されました。私はこの経過を知りませんが、産業界、官界のCISPR国内体制を強固にし、CISPR会議における日本の立場を確立するために、日本で会議を開催することを企てられ



写真1 オランダ・キューケンホッフにて（1979年ハーグ会議、左より、田中、黒沼、岡村、蓑妻先生、沢田さん）



1985年 CISPRシドニー会議

たようです。椿山荘で開かれたパーティで、先生が多数の産業界や官界の代表者を前にして、緊張されていたことを覚えています。一世一代の晴れ舞台だったのでしょう。

この東京会議の大成功によって、日本に対する各国の認識は高まりましたが、蓑妻先生は更にその上を狙われました。すなわち、運営委員会Steering Committeeの委員になり、CISPRの運営に直接参加することです。運営委員会は、CISPR議長、副議長、各SCの委員長、さらに議長が認める何人かの人で構成されています。そこで先生は、1982年のストックホルム会議の時、公式行事の湾内クルーズの遊覧船の中で、議長のProf. Showersに熱心頼んでおられました。私はそれを目撃しましたが、Prof. Showersから前向きな返事をもって、そのことを我々に話されるとき先生の得意そうな顔が忘れられません。

このように、先生は努力家であると共に、機を見るに敏な策略家でもありました。また、上流指向で、マナーの悪い人は大嫌いでした。ある会議では、代表の一人の態度が悪かったため、その人を会議中でも帰国させたいとの意向を漏らされて、我々は困りました。また、代表団の懇親会では、先生は何時も非常に高級なレストランを探してきて、我々に薦められました。これに関連して思い出すのは、CISPR会議でロシア開催が話題になる度に、先生がレニングラードのエルミタージュ美術館へ行くのを楽しみにされていたことです。奇しくも、今年のCISPR会議はセントペテルスブルク（旧、レニングラード）で開かれ、私は先生が憧

写真2 ディズニーランドにおける蓑妻先生ご夫妻
1986年サンディエゴ会議：（左）黒沼、（右）岡村さん

れていた美術館を訪れましたが、先生が御一緒だったら、どんなに喜ばれたことかと思うと、残念でした。

70歳を越えられて

これだけ我が国のCISPRに貢献された指導者・蓑妻先生でしたが、70歳を越えられた頃から指導力や神通力に陰りが見えてきました。一方、我々若手は10年以上のワンマン体制にマンネリを感じていました。結城さん、近田さん、松下の井上さん等のキーパーソンがCISPRに参加するようになってきた1985年頃から、電気通信技術審議会CISPR委員会を新体制に変える必要が出てきたため、委員長として新たに東北大学の高木先生をお迎えすることを願っていました。このことについて郵政省と何度か相談した結果、ようやく数年後に蓑妻先生から高木先生への譲位が実現しました。その後も、蓑妻先生は毎年CISPR会議に参加されていましたが、1994年の北京会議を最後にCISPRから完全に引退されました。この最後の北京会議では、体調が優れなかったせいか、漢方薬を一生懸命探し回っておられました。その際、“もうこれからは来ないから、後は君たちがやりなさい”と言われたのが印象的でした。

1997年秋に横須賀でCISPR会議を開きましたが、その際、先生の蒔かれた種がどれほど生長しているかを是非とも御覧戴きたく、ご案内致しましたが、あいにく体調が悪くお越し戴けませんでした。それが、今でも心残りです。そして、昨年6月のサンディエゴ会議

期間中に、蓑妻先生の御逝去の報に接しました。甚だ因縁めいた話ですが、先生は最後までCISPRが気掛かりだったのではないのでしょうか。米国にいて、御葬儀に参列できない悔しさを覚えました。

現在のCISPR体制は、さらに新しいExpertが何人も加わり、委員長も東京農工大の仁田先生に代わりしました。また、我が国は、CISPR会議で新規プロジェクトを起こすなど、主導的な役割を果たしており、今や一大勢力になっています。勿論、元老の岡村さんは、1987年頃から今日まで、SC-BのSecretaryを勤めておられます。この20年を振り返ると隔世の感があります。このように我が国のCISPRが発展できたのも、蓑妻先生が長年にわたり献身的に礎を作って下さったお陰であると思います。

学者として

既に述べましたように、私は宮島さんの研究室で妨害波測定器、特に指示計と検波器の研究をしていましたが、当時の我が国独自の妨害波測定器が主に蓑妻先生の御研究によって作られたことを知りました。先生は、中間周波段のパルス応答波形を正弦波で近似し、解析的手法で準尖頭値検波器の応答を求められました。私がコンピュータで正確に計算した結果、先生の応答がほぼ正しいのに驚きました。また、先生は監理

局の職員を指導して、都市雑音、特に自動車雑音の実測を精力的に行い、テレビのサービスエリアを決めるための基準策定に関与されました。さらに、家庭用電気機器の雑音に関する研究もされており、これらを博士論文にまとめられました。この論文は、先生の著作「通信と雑音」(共立出版)の元になりました。その後は主に研究指導に携わられましたが、特に印象深いのは、1978年頃にCISPRで妨害波測定場のサイトアッテンションが問題になったとき、その計算を宮島さんの研究室に依頼されたことです。この仕事は1990年頃から私が引き継ぎました。このように、蓑妻先生は人工雑音に関する数多くの先駆的な研究と指導をされました。また、戦後間もなく、職務上、先生は米国連邦通信委員会FCC規則を研究され、今日の電波法の草案を作られたそうです。

なお、私事になりますが、蓑妻先生は私が博士号をとることを望んでおられ、見本に先生の博士論文まで戴きました。また、1995年秋に東工大で開催された私の博士論文公聴会には、病み上がりにも関わらず突然ご出席いただき、身に余るお褒めの言葉を戴いたことは、一生忘れられません。これが先生にお会いした最後でした。長い間、本当に有り難うございました。

最後に、これまでの蓑妻先生の御指導御鞭撻に感謝致しますと共に、先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。



1989年 CISPRコペンハーゲン会議



蓑妻先生が最後にCISPR会議に参加された、1994年北京会議の日本代表団懇親会



蓑妻先生の思い出

松下電器産業（株）

井上 正弘

蓑妻先生とCISPR会議

私が初めてCISPR会議に参加したのは1985年のオーストラリア・シドニー会議ですが、そのとき日本代表団の団長であった蓑妻先生のご活躍ぶりは今でも鮮明に思い出されます。シドニー会議はオーストラリア規格協会の会議室で2週間にわたって開催されましたが、初めての国際会議への参加でとまどっていた私にも「会議の雰囲気はどうですか？」などと声をかけて緊張をほぐして下さいました。CISPRの大先輩で先生についてよくご存知の杉浦さん（当時、郵政省電波研究所）や岡村さん（当時、機械電子検査検定協会/JMI）から、蓑妻先生は大変厳しい方で、会議の途中でも「君はもう帰りなさい。」と言われた人もいる、とお聞きしていましたので、自分も言われはしないかとひやひやしていたのですが、意外にも気さくな感じで、ほっとしたのを覚えています。

英語のヒヤリング力に自信がないのでテープレコーダを持っていきましたが、他の国のメンバーで会議場

に持ちこんでいる人はいなかったもので、蓑妻先生に「国際会議では自分のテープレコーダで録音してはいけないのでしょうか？」とお聞きしたところ、先生は笑いながら「大丈夫。もしなにか言われたら、"This is my hearing aid." と答えておけばいいんだよ。」と教えて下さいました。それ以来、毎回会議場で堂々と机の上にテープレコーダとマイクを並べて会議の内容を録音しています。（英語力の十分ある人には必要のないことですので、自慢できる話ではありませんが。）

1985年のシドニー会議の当時はCISPRにはSC-AからSC-Fまでの6つの小委員会しかありませんでした。シドニー会議でSC-G（情報技術装置/ITEを取り扱う小委員会）を設置する話があって、その後イタリア・カリアリの総会で正式に決定が行われました。蓑妻先生は会議後に日本代表団の全員を集めて、レストランで巨大なロブスターの料理を食べながら、将来SC-Gが重要となる、と熱っぽく語られていたことを思い出します。まさにその通り、現在はCISPR/GはCISPRの中で最も注目を集める重要な委員会となっています。

写真1はCISPR会議におけるスナップですが、会議場だけではなく、会議後はホテルの部屋に集まって議論したこともありました。また、奥さんをご同伴されることも多く、会議後の夕食や日本代表団のディナーテーブルではよく一緒に食事させて頂きました。



写真1 シドニーのホテルで（左から岡村、山際、蓑妻先生、川橋さん、井上）

CISPRのイミュニティ規格作成について

本来、CISPRは放送受信障害の防止を目的として結成されたことから、作成する規格は無線周波のエミッション規格だったのですが、ラジオ・TV放送受信機

のみはイミュニティ規格が作られていました。ところが、ITE（情報技術装置）のイミュニティ規格がCISPRで検討され始めた時、IECの技術委員会TC77の組織再編成により、TC77があらゆるEMC（電磁両立性）の基本規格を作成する委員会と位置付けられたことから、イミュニティ規格作成作業の重複が指摘され、ACEC（電磁両立性諮問委員会）で意見調整が図られた結果、イミュニティについてはTC77が試験方法の基本規格を作成し、CISPRは製品群規格（Product Family Standard）として限度値と試験条件を作成する、との方針が打ち出されました。

このような方針が固まるまでの経過において、当時我が国のCISPR国内委員会の委員長であった蓑妻先生もかなり苦慮されたとお聞きしております。先生はイミュニティ（先生は「インミュニティ」と称しておられた）についての考え方を国内のいろいろな立場の人から聞きたい、と私にも電機業界の一員として意見をお聞きになりました。その当時の私はCISPRについての十分な見識も持っていませんでしたが、杉浦さんや岡村さんなどとともにCISPRの将来の方向について先生を中心として熱心に議論したことを思い出します。

蓑妻先生のお宅にて

シドニー会議以来CISPRに深く関わるようになり、CISPR/Fの過去の議論の経過について知りたいと思って蓑妻先生の渋谷のご自宅を訪問したことがあります。JR渋谷の駅からそれほど遠くない閑静な住宅街の中にあるマンションの7階だったと記憶していますが、まず驚いたのは、玄関に入ると応接間の壁も廊下にもところ狭しとCISPR文書がうずたかく積み上げら

れていて、CISPRにおける先生の歴史の長さにご造詣の深さを目の当りにした思いがしました。

先生は常々「業界の人ももっと雑音の勉強をしない。」と言われていましたので、お邪魔したときに、先生から「無線雑音に関する研究」という、昭和29年（1954年）に書かれた論文をお借りし、近くのコンビニエンスストアでコピーを取らせて頂いたものが今も手元にありますが、先生のご期待に反してなかなかじっくり読むことができず、書類ロッカーの片隅に眠らせてしまいましたことを申し訳なく思っています。

また、別の機会にお訪ねした時は、先生は70歳を超えておられたと思いますが、「今、ジョギングをしてきたところだよ。」と、とてもお元気な様子でした。

CISPR会議では1994年の北京会議でお会いして以来、最近ではほとんどお目にかかる機会がなかったのですが、我が国のCISPR国内委員会の生みの親であり、電波雑音の研究と電波障害の防止に献身された先生に深く感謝しつつ、心よりご冥福をお祈り致します。



写真2 シドニー会議（1985年 蓑妻先生、井上、結城さん）



SC-Gにかける夢

(株) オプトウェーブ研究所
結城 主央巳

蓑妻先生は英語でしゃべりまくるのが大好きで得意だった。しかし、その発音はけっして上手とは言い難かった。

シドニー会議合間の日曜日に私は先生のお供をしてキャプテンクック・クルーズとか言う食事付きの遊覧船に乗り込んだ。その日は朝から先生と一緒に、キングスクロスを歩き回ったり、マクドナルドでハンバーガーをかじったりしていたものだから、二人ともすでに会話の種が切れていた。

そんな時に遊覧船の船長が操船しながら乗客の問い掛けに気さくに応えているのを見出し、先生に船長のところへ行かれることをお勧めした。さっそく先生と船長の会話が始まり、私は傍でほっとしていた。すると突然、船長が私の方を見て、

「おまえ、なにかいいアイディアがないか？」

と、聞いてきた。二人の会話は、潮汐と操船の話からだんだんエスカレートし、地震による高波、津波と操船の話へと移行してきたようである。先生が発音する“アースクエイク（地震）”と言う言葉が船長にはどうしても理解できないらしい。日本人の私には非常に理解し易い発音だが船長にはどうしても通じない。

そこで私が、

「大地が動くこと。」

と、説明してようやく話を本筋にもどすことができ、その後も延々と二人の会話が続いた。

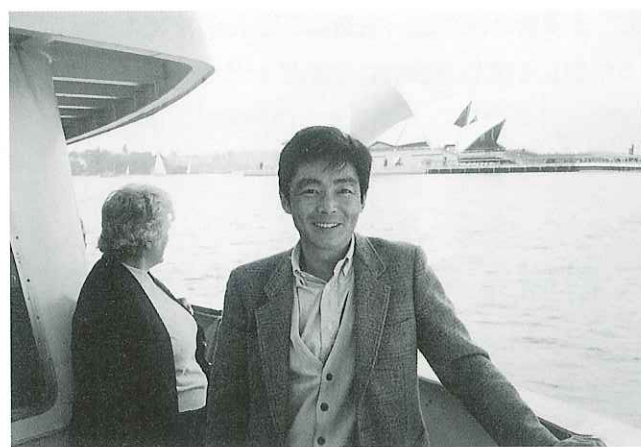
SC-G設立へ向けたCISPR会議のおこなわれる朝、朝と言っても午前2時、ホテルの部屋のドアをノックする音で起され、寝ぼけまなこで出てみると、先生が神妙な顔で立っておられた。

「明日の会議のことなんだが、なんとしてもSC-Gに立候補することとして、英語のまずさを指摘される可能性がある。そこで、当選した暁には優秀な通訳を

用意する準備のあることを表明したい。通訳にかかる費用は寄付等でなんとかかなうと思う。当選することが第一だからそれから体制をつくれば良い。君、どう思うかね。」

いかにも得意げに世界各国の代表とまるで英会話を楽しんでいるかのようにしゃべりまくる先生だが、発音と言う語学の面ではやはり悩んでおられた。そして、今日行われる会議なのに、“明日の会議”と言うところからみると、一睡もせずに悩んでおられた。このことから、語学の問題のうしろに隠されたSC-Gにかける先生の情熱のものすごさを痛感せざるを得なかった。

当時、私はEMCへ入門したてで、事の重大さがよく飲み込めていなかった。しかし、SC-Gの設立とあわせて我が国でも“情報処理装置等電波障害自主規制協議会（VCCI）”や本EMCCレポートの発行元である“不要電波問題対策協議会（EMCC）”が設立され、さらに日本の各地にEMCサイトが建立されるなどEMCをとりまく状況が一新されたことは事実であり、これを機に産学官のEMCに取り組む姿勢も急速に強化されていった。



キャプテンクッククルーズで先生に撮っていただいた思い出の写真

蓑妻先生はSC-Gの設立によってEMCの世界がこのように大きく変わることを予知していた。それだからこそ立候補したのであり、技術大国日本として世界に貢献することは当然である、と言いつつも、長年にわたる先生御自身のEMCへの取り組みの集大成としても、SC-Gの議長に、一歩さがっても幹事に何としても就任しなかったのにちがいない。

SC-G立候補の件は、何年も前からの綿密なロビー活動等で賛同国を増やすなどの行為が十分に行われなかったため、先生の夢で終わってしまった。今思い出してみると、私自身も万一当選したら後のバックアップが大変なことになるのでは、と、心の奥底では感じていたし、先生を除く他のメンバーも、はなはだ失礼な言い方ではあるが、情報収集活動はさることながら、当選へ向けて精一杯立ち回ったようには見えなかった。

先生がSC-Gにかけた夢から15年が経った。その間、岡村万春夫さんがSC-Bの幹事に推挙されてみごとに当選なさったが、そのあとが続かない。“情報技術装置 (ITE)” という新しいことばを作り、現代の花形であるIT社会を先取りしたSC-Gに対し、現在も日本は非常に多くの技術的寄稿を行っている。SC-G設立以降、大学でEMCを専門に教える先生も増えた。企業でEMCを専門に扱う人も増えた。そんな中で蓑妻先生の夢は今も生きている。今こそこの夢を実現してや

ろうと真剣に取り組む必要はないだろうか？留学等も含めてEMCの学問のみならず英会話を徹底的に勉強し、蓑妻先生を越えて世界屈指のCISPRの議長となる人をみんなで育てていく時期が到来している。特に、最近の日本からの技術寄与の質と量をみるとそう思わずにはいられない。私自身、CISPRの会議に参加させていただいている時、フランスの代表に、

「英語が難しくて困っている。」

と、愚痴をこぼしたことがあった。コーヒブレークの時であり、まわりにイタリア、ドイツ等の代表もいてこの愚痴が聞こえてしまった。

「我々も英語国ではない、しかし皆頑張って英語の勉強をしている。英語を使わない国がどれだけ参加しているのか知ってるか。」

と、皆でよってたかつてはげましと言うより総スカンを食ってしまい恥ずかしい思いをしたことがある。それから英会話の個人レッスンへ通ったりしたが、意志薄弱を才能が無いと言うことでごまかしてあきらめてしまった。

蓑妻先生の追悼号執筆の依頼をうけて、まっさきに思い浮かんだのが、先生のSC-Gにかけた夢であり、英語のことであった。私は現在CISPRから遠ざかっているが、現役の方々に先生の遺志をついで、是非さらに発展させていただきたいという思いで一杯である。



先生のとなりで真面目に仕事をする筆者



蓑妻二三雄先生との 出会いと別れ

CISPR国内委員会第2代委員長
東北文化学園大学科学技術学部学部長
応用情報工学科教授

高 木 相

蓑妻先生との出会い

私が東北大学の大学院学生の頃でしたでしょうか、蓑妻先生は郵政省東北電波監理局長として赴任され、仙台に住んでおられたことがありました。私の先生である真野国夫先生が、今度東北電監に蓑妻君が来る、と云われて、初めて‘蓑妻’という名前を聞いたように思います。当時の私にとって、電監の局長といえば雲の上の人ですから当然お会いしたことはありませんでした。初めて先生にお会いして拝顔の榮に浴したのは昭和59年（1979）のことでした。私がEMCという新しい分野に足を踏み入れて間もない頃のことです。この年、チューリッヒで2年おきに開催されているEMC国際シンポジウムがオランダのロッテルダムで開催されました。この時、蓑妻先生をはじめ我が国のCISPRの方々が多く出席されていました。写真にあるように、杉浦先生もご一緒でした。私が昔雲の上の人と思っていたあの蓑妻先生がこの方かと思ったものでした。写真をみると先生も私たちも若く、20年前が偲ばれます。

CISPRとの関わり合い

郵政省電波技術審議会ではCISPRの審議が行われていることを知ったのは、私がこの審議会の専門委員になってからです。昭和57年からだったと思います。この頃私は電子情報通信学会（そのころは電子通信学会といったかもしれません）の環境電磁工学研究専門委員会の幹事（初代委員長の佐藤利三郎先生、二代目の故赤尾保男先生のお二人に仕えました）でしたので、CISPR

の話も研究会で話題になり、亡くなられました東大の宮川洋先生に解説していただいた覚えがあります。その後蓑妻先生にもお願したような気がします但定かではありません。しかし、話しを聞いただけではよく分かりませんでした。ただ、CISPRはノイズに関するスタンダードを作る場であるということがおぼろげながら理解できた程度でした。

たしか、昭和63年のことだったと思います。蓑妻先生から電話を頂きました。内容は、私にCISPRの国内委員会の委員長をやってくれということでした。つまり、蓑妻先生から私に委員長を交替するのでよろしくということでした。私は突然でもあるし、CISPRの国内委員会には何度か出席はしているものの、全く分かっていないので、口ごもっていると、先生曰く、君を専門委員にしたのはこのためなんだから、ということでした。そこで初めて、私を電技審の専門委員に入れたのは蓑妻先生だったのかと、そこではじめて気がついた次第でした。

CISPR国内委員会委員長を引き継いで

昭和63年（1988）にCISPR国内委員会委員長を蓑妻先生のあとを引き継いでやることになりました。CISPRの運営は運営委員会(Steering Committee)が行っていることを聞かされていましたが、蓑妻先生はこのメンバーになっておられました。また、実際に自動車関係（D小委員会）で活発に討議に参加されていたので、国内委員長を退かれたあとも毎年欠かさず国際会議には参加されていました。その都度運営委員会のことを私に話されました。未熟な私を教育しようと

なされたのだと思います。この頃のCISPRではUnified Standard が議論されていたようでした。しかしこれは無理だということで、Generic Standard で行くことになったようで、その後議論が煮詰まって現在成文化されています。

蓑妻先生にいつまでも頼ってはいけないという郵政省の考えで、運営委員会の委員も私に交替する話が持ち上がってきました。平成2年のことです。郵政省の当時の監視監理課長と私と蓑妻先生と3人で夕食をとりながら話し合いました。もともと運営委員会はCISPRの顔役の集まりで、明確な委員の選出の手続きがないので、蓑妻先生から高木へのバトンタッチをどういうシナリオでやるかというのが話題の中心でした。ここで蓑妻先生のお考えを聞き、それで行こうということになりました。そのシナリオは、今度の北京会議で運営委員会に私を連れて行き、そこで蓑妻先生が私を紹介して、交替の意志表示をされ、そのあと私を残して蓑妻先生は退席する、というものでした。

運営委員会委員長を交替して

平成2年のCISPR会議は北京でした。このシナリオに従って、私は蓑妻先生に連れられて運営委員会に行きました。先生の流暢な英語で私の紹介があり、蓑妻先

生の辞任と交替の意志が述べられました。そして、先生は私を残してでて行かれました。この時はCISPRの委員長が欠員でイタリアのNano教授が委員長を代行していましたので、委員の交替は議題にはなりませんでした。私はなんとなく不安定な存在でしたが、平成7年、アフリカのダーバン会議で議長（運営委員長）が説明し全員の賛同を得て私の運営委員会委員が承認されました。

蓑妻先生はしかし、平成2年の北京会議のあとCISPR会議に出席されることはありませんでした。思えば北京では、先生の体調は必ずしもよからず、先生はいろいろ事前に手配されていたらしく、現地で漢方薬を買われていたことを思い出します。多分これ以来私は先生にお目にかかっていないと思います。長い間のご指導を本当に感謝する次第です。

蓑妻二三雄先生は、戦後の廃虚の日本から技術立国日本まで、我が国ので電気・通信・情報の広い分野で、ご老体を押して常に指導的立場で我が国の産業発展のために尽くされました。先生はこの意味で私たちの鏡であります。深甚なる謝意を表しながら、また、天国へ旅立たれたときがちょうどCISPRのサンディエゴ会議の期間中であつたことが、先生の魂とのつながりを彷彿させるものがあり、御霊の安からんことを祈りながら筆をおくことといたします。



1979年 EMC国際シンポジウムにて
(左から杉浦さん、一人おいて高木、蓑妻先生、黒沼さん)



蓑妻二三雄先生と私

CISPR国内委員会第3代委員長
東京農工大学工学部

仁田 周一

蓑妻先生と私とのお付き合いは、本追悼号にご執筆される諸兄に比較して長いものではない。1970年代の後半、先生が農工大を定年でご退官された頃、たまたま私が電気学会の会誌編集委員をしており、カーエレクトロニクスの特集号を出そうということになり、蓑妻先生のお名前が真っ先に総論の執筆者として上がってきたのが、恥ずかしいことであり不勉強であったが、先生のお名前をお聞きした最初ではなかったかと記憶している。

先生は戦前から自動車に興味を持たれ、運転されるだけではなく何台かの中古車を解体し、その中から部品をピックアップしてご自分で一台の車を組立てられるほどの、いわゆる“カーマニア”であったと伺っている。

最初に先生にお会いしたのは、私がまだ電気メーカーに勤務していた1980年代の前半、社内でノイズ対策技術のレベルアップの必要性が高まり、先生に社内セミナーの講師をお願いした時である。依頼をして御都合をお伺いながら、日時、場所等の連絡が遅く御無礼をしお叱りをいただいたことを記憶している。セミナーでは終始にこやかにやさしく話をされ質問にも丁寧にお答えいただいたことが印象に残っている。その後、社内での中堅技術者育成のための技術ゼミナール（社内から選抜された入社5年～10年の技術者を一週間、研修センターに罐詰にし、座学・演習を行う）の一つとして「電子機器のノイズ対策技術講座」を開設した際、先生に社外講師をお願いし「ノイズ技術と電気磁気学」をお話していただいた。この時のカリキュラムを見ると、反射とクロストーク、シールド、フィルター、インバータのノイズ対策、規格・測定法等、現在あちこちで開かれているEMCセミナーと驚くほど類似しており、あゝEMC技術は20年経過してもあまり

進歩していないのではと愕然たる思いである。このゼミナールでは夕食時から夕食後も、講師と主催者側の私達や受講生との質疑応答があり、先生にも研修センターにお泊まりいただいて色々御指導をいただいた。「この場合はオフレコなのだろう、仁田さん。」と言われ、ノイズで実際に困ったお話や失敗談等をにこにこしながらお話いただき、受講生のみならず私達も大いに満足したのを憶えている。この頃、やっと先生に名前を憶えていただいたたのではないかなと思う。

さて、1984年日本での第一回環境電磁工学国際シンポジウム（組織委員長、佐藤利三郎先生）が開催され蓑妻先生が「日本における無線雑音の研究—歴史的展望」について基調講演をされた。このシンポジウムについては諸先輩がお書きになると思うので割愛するが私には2つ印象に残ったことがある。一つは、1926年2月26日の東京朝日新聞の記事の紹介があり、これが日本でのEMC関連の印刷物第一号であろうということ、もう一つは「私はこの講演のために、丸々一ヶ月間を費やし没頭した。」と仰ったことである。聴衆の一人として聞いていた私は準備の整った講演に感銘し、こんな偉い先生がそこまで時間を費やし準備されるのかと感心した思い出がある。ここまでは、どちらかと言うと先生を外から敬って見ていた（大先輩に失礼な表現だと思うが）ように思う。

1985年縁があって私は東京農工大学に赴任した。先生はすでに御退官されていた。当時、農工大には知人が一人も無かったこともあり先生に赴任のお手紙を出した所、早速、居室にお見えいただき激励をいただいた。「大学の先生は、ニュートラルでいいもんだよ。大いに頑張るたまえ。」と、大先生のお出ましと直接の激励に感動したのが昨日のここのように思う。

当時、郵政省には大学の同級生であった大井田清氏

(後の官房審議官)がおり、CISPR国内委員会委員長であった蓑妻先生と彼の推薦でCISPR国内委員会に参加させていただくことになったと伺っている。

最初の頃、国内委員会に出ても話はよく判らないしよく欠席した。すると蓑妻先生から電話があり「どうだ、元気かい?」と、ここまでは優しく話をされるが次に「さぼっていたら駄目じゃないか。出ていればその内に判ってくる。必ず出席しないさい。」とのお叱りである。この頃から私にとって、いい意味での優しくて怖い先輩となった。叙勲をされた際には、賞状とメダルを持って私の研究室までわざわざ来ていただき、拝見させていただいた。

私が初めてCISPR国際会議に出席したのは1992年のワルシャワで、プロツラフでのEMCシンポジウムに引継ぎ行われたのでついでに出席したように思う。当時蓑妻先生は、すでに国内委員会委員長を高木相先生に譲られていたが、Steering Committeeのメンバーとして出席されていた。高木先生が御都合でワルシャワ会議には欠席されたため郵政省の水町さんから私に「代理で団長をやって下さい。」と言われた。「団長って何するのですか。」に水町さんは「何もやることはありません。」と言われたが本当に何もやることはなかった。たゞ、日本からの出席者が現地で一同に会し夕食を共にするという行事があった。その夕食の乾杯の音頭をとる際に私は蓑妻先生にお願いしたが、「私は引退した人間だから」と辞退をされ、私が乾杯の音頭をとった。出所進退をわきまえられ、出しゃばらず、教えられることが多かった。団長の仕事は、この乾杯の音頭だけである。この2・3年後、蓑妻先生からいただいた年賀状に手書きで「EMCからは完全に引退しました。」と書かれていたのが印象に残り、淋しい思いをしたのを忘れることが出来ない。蓑妻先生とCISPR国際会議で御一緒させていただいたのはワルシャワの一回だけである。その後ロッテルダムと北京は私が欠席し、蓑妻先生と御一緒できなかった。1995年南アフリカのダーバンで行われたCISPR国際会議の前に蓑妻先生から電話があり「南アフリカの治安が悪いので行くのを躊躇している。」とのことで欠席された。南アフリカは1975～76年の1.5年間私が滞在した国で、

当時は清潔で安全なすばらしい国で私の第2の故郷と思っていたので「そんなことはないでしょう。」と申し上げた。しかし、1995年の南アフリカは20年前とは打って変わり非常に治安が悪く、危険であった。先生には後程、私の無知と間違いをお詫びした。ダーバン以後、私はCISPR委員会に出席し、高木先生の後を受け現在、国内委員長を仰せつかっている。今回いただいたCISPR国際会議の出席状況のリストを見ると、1978年に蓑妻先生が出席された翌年から出席者が増え、CISPR国内委員会の組織化が、先生の御尽力によって行われたことがよく判る。私はその路線の上をよたよた歩いているにすぎない。もっとしっかりやるべきと先生のお叱りが聞こえるような気がする。

蓑妻先生は、私にとって大学の先輩(先生は理学部地球物理学科、私は工学部電気工学科)であり、農工大の教官としての先輩(先生は電子工学科、私は機械システム工学科)であり、またCISPRの先輩である。農工大には我々の出身大学の教官が少ないためか、年末に集まって忘年会・親睦会を行っておりOBの先生方にも御案内を出している。蓑妻先生にはなかなか来ていただけなかったので10年前頃から私からお電話で出席をお願いしてきた。一度だけ御出席をいただいた。寒い時期の夜に行われるので「非常に寒い日」や「少し風邪気味」の時にはよく直前に出席取消しのお電話をいただいた。いつも御自身の健康には細心の注意を払われていたと思う。

先生が組織化され、お育てになったCISPRのメンバーがサンディエゴ会議に出席している最中に訃報が入った。まるで「君達、心配しないでいいよ。しっかり、そちらで仕事をしていなさい。」とでも優しく言われているように。何か運命的なものを感じながら、早くも一年余が過ぎている。私にとっては、多くの場での先輩である先生がご逝去されたことは、いつも優しく叱って下さる親を亡くしたような気持ちである。サンディエゴのSteering Committeeでは先生のご逝去の報に接し、メンバー全員で黙祷をし哀悼の意を表した。

パイプをくわえ、ダンディで愛妻家であった蓑妻先生、安らかに眠り下さい。

合掌

1997 CISPR横須賀会議

蓼妻先生の蒔かれた種が生長しました（編集担当）

●会議



●ウェルカム パーティー



●国際会議場正面





あとかき 追悼の辞

不要電波問題対策協議会会長
名古屋工業大学

池田 哲夫

袁妻先生が82歳でご逝去されました事に、謹んで哀悼の辞を捧げます。

先生は、不要電波問題対策協議会には最初から学識経験者としてご参加頂いております。佐藤先生の司会で協議会の総会が始まりますと、パイプを手にしなが、毎回のよう一言二言コメントをされたお姿が目に残ります。

第一回の不要協の講演会では、佐藤先生の「EMC の過去と未来」という講演に引き続いて、「CISPRの過去と未来」というテーマでご講演を頂いております。その中で、規制値が話し合いによって定められていく過程、つまり調和の問題が論じられております。相手国の意見を尊重しつつ、自国の利益を守るためには、どのような議論を進めるべきかについて、腐心されていた様子が伺えます。1975年に電子通信学会の回路網技術委員会で EMC 特集が組まれた折りに、CISPRの目的や歴史などを述べておられますが、その折にも、参加者の心構えを7項目にまとめておられます。つまり、諸外国の委員、彼らは何をしようとしているのか、彼らの利益は何であるかを理解し、我々の立場を理解してもらうためには、どのようにすべきか、また、我々はどのように協力できるのかを考えるべきだと説いておられます。国際会議の中で、日本の果たすべき役割について熟慮され、また若い我々にどのように対処すべきかを教えて下さいました。

わが国の国際的な地位も飛躍的に向上しつつありますが、さらに前進を遂げるべきときに先生を失いましたことは、先生の優れた識見を今後とも期待するところが大きなものがある時に、誠に残念です。

袁妻先生は、戦後の電波関係法令の整備に努められると同時に電磁波を用いた各種の通信に及ぼす雑音の研究に従事され、雑音の統計的な性質を明らかにすると共に、その測定方法の研究をされております。その結果が、昭和31年には、「通信と雑音」として出版されております。まだ、トランジスタではなく、真空管で記述されておりますが、EMC の測定器、測定法、データ処理などの分野に互って論じられております。基本的には現在 EMC 問題として議論されていることと同じ事であり、このように先生は、EMC の主眼が放送障害であった頃から EMC の分野で幅広くご活躍頂き、成果をあげられておられます。

さらに、教育に関しても特に関心を持たれ、多くの学校で子弟の指導に当たられました事は、先生の人柄を偲ばせるものであります。

21世紀を前にした情報社会では、電波の利用が一層重要な位置を占めております。電磁波雑音が電子機器に混入して誤作動を生じさせる EMC 問題は、社会的に大きな問題となります。不要協の意義も益々重要になり、その成果が社会に貢献すべき時であります。先生のご遺徳を偲んで、ご意志を無にすることがないよう、電波の有効な利用が計られるように努力したいと思います。今後とも、先生の豊富なご経験と優れた識見を当協議会に反映させ、一層の成果をあげるように努めたいと考えております。

ここに、先生のご功績を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

【 蓑妻二三雄先生の御業績 】

◆御略歴

大正5年9月28日生、(本籍地：山口県)		
年及び月	〈郵政省関係〉	〈文部省関係等〉
昭16年	京都帝国大学理学部地球物理学科卒業	
昭17年	海軍技術研究所	
昭20年	文部省電波物理研究所（現、通信総合研究所）	
昭23年 8 月	逓信省電波局電波課電波係長	
昭23年10月	逓信省臨時電波規制部規制班主任	
昭24年	電気通信省電波庁電波部技術基準係長	
昭25年	電波監理総局電波部技術課基準係長	
昭26年～29月		東北大学工学部講師
昭27年	郵政省電波監理局周波数課課長補佐	
昭27年11月	電波技術審議会専門委員	
昭30年	郵政省電波監理局工務課課長補佐	
昭34年	郵政省関東電波監理局監督部長	
昭35～38年		東京工業大学工学部講師
昭35年 6 月	郵政省電波監理局陸上課長	
昭37年 9 月	郵政省電波監理局無線通信部陸上課長	
昭38年	郵政省東北電波監理局長	
昭39年11月	依願退職	
昭40年		日立製作所
昭41～51年		東海大学工学部教授
昭48～平9年		成蹊大学工学部講師
昭51～55年		東京農工大学工学部教授
昭55～平3年		東京理科大学工学部講師
昭年61	勲三等瑞宝章	
平成11年6月3日没（享年82歳）		

◆御研究および御活動

研究内容		関与された主な委員会等	
昭和17～23年	空電雑音および電離層観測の研究		
昭和24年	雑音測定器の開発	昭和24年	電気学会関西支部「妨害電波研究委員会」（加藤信義教授委員長）が設置される。
昭和24～29年	各種雑音源に関して雑音強度測定	昭和24～26年	「超短波通信研究委員会」（抜山平一教授委員長）が設置され、「雑音科会」において雑音測定器及び都市雑音測定を担当。
昭和25年	人工雑音の測定結果に基づいてラジオサービスエリアの草案策定	昭和25年～	電波技術審議会において、人工雑音の許容値、測定法、防止法等の審議が始まる。
昭和26年	雑音測定器の理論的研究		
昭和27年	自動車雑音等の研究成果に基づいてテレビ・サービスエリアの草案策定	昭和27年	電気学会「送配電線電波障害調査特別委員会」（星合教授委員長）が設置される。
		昭和27年	電波技術協会「テレビジョン雑音防止委員会」（山本教授委員長）が設置される。
		昭和27～29年	テレビジョン研究委員会（丹羽教授委員長）が設立される。
		昭和28年	日本電機工業会「電波障害防止対策委員会」（山本教授委員長）が設立される。
昭和29年	テープレコーダ利用の相関器に関する特許申請	昭和29～45年	自動車技術会自動車電波雑音研究委員会・委員長。
昭和31年	論文「無線雑音に関する研究」により、京都大学より工学博士の学位取得		
昭和31年	共立出版より「通信と雑音」が出版される		
		昭和33～39年	電波科学研究連絡委員会（URSI国内委員会）委員
		昭和35年	国際電波科学連合（URSI）第14回総会組織委員会委員
昭和39年	米国電気電子学会（IEEE）Fellowとなる		
		昭和41～54年	電波技術審議会専門委員
		昭和45～48年	IEEE Fellow委員会太平洋地域（region 10）代表
		昭和45～54年	自動車技術会エレクトロニクス研究委員会委員長
		昭和47～62年	電波技術審議会第3部会において、CISPR国内委員会委員長
		昭和48～平成6年	CISPRにほぼ毎年参加
		昭和49～52年	工業技術院・大型工業技術研究開発連絡会議委員
		昭和52年	自動車技術会30周年記念表彰「多年にわたる研究指導」、自動車技術会規格会議電装部品部会長
		昭和54年	日本工業標準調査会臨時委員、自動車技術会エレクトロニクス部会長
		昭和54～60年	電波技術審議会委員
		昭和55年	CISPR東京会議実行委員会委員長
		昭和57年	CISPR運営委員会（Steering Comm.）委員
		昭和59年	IEEE Centennial Medal 受賞
		昭和60年	IEEE Life Fellowとなる
		昭和60～62年	電気通信技術審議会専門委員

CISPRの審議組織

2000年6月現在

会議の種類	所掌事項	議長及び幹事	Working Groupの 所掌事項	議長及び幹事	我が国の Expert Member
総会 (Plenary Assembly)	議長等の選出、組織の 改正等	Chairman : P.J.Kerry (U.K) Secretary : C.Beckley (U.K) Assistant Secretary : J.B.Childs (U.K) Vice Chairman : A.Wall (U.S.A) M.C.Vrolijk (NL) E.Nano (Italy)			
運営委員会 (Steering Committee)	議長へのアドバイス等	Chairman : P.J.Kerry (U.K) Secretary : C.Beckley (U.K)			仁田 周一 (東京農工大)
A小委員会 (Sub-committee A)	無線妨害波測定及び統 計的手法	Chairman : L.A.Wall (U.S.A) Secretary : D.N.Heirman (U.S.A)	WG 1 : 無線妨害波測定機器	CH : D.N.Heirman (U.S.A) Sec : W.Schaefer (U.S.A)	野島 俊雄 (NTTドコモ) 山中 幸雄 (郵政省通信総合研 究所)
			WG 2 : 妨害波のパラメータ測 定	CH : M.Stecher (Germany) Sec : B.Gorini (Italy)	篠塚 隆 (郵政省通信総合研 究所)
B小委員会 (Sub-committee B)	工業、科学及び医療用 高周波装置からの妨害	Chairman : M.C.Vrolijk (NL) Secretary : 岡村万春夫 (Japan)	WG 1 : 工業、科学及び医療用 高周波装置からの妨害	CH : M.C.Vrolijk (NL) Sec : B.Despres (France)	岡村 万春夫 (日本品質保証機構)
C小委員会 (Sub-committee C)	電力線信号通信、配電 及び発電設備とシステ ム、機器と電気鉄道か らの電磁妨害	Chairman : D.Cristescu (Romania) Secretary : C.Beckley (U.K)	WG1 : 電力線信号通信、配電 及び発電設備とシステ ム、機器と電気鉄道か らの電磁妨害	CH : R.Cortina (Italy)	富田 誠悦 (電力中央研究所)
			WG2 : 電気鉄道	CH : R.Cortina (Italy)	川崎 邦弘 (鉄道総合技術研究所)
D小委員会 (Sub-committee D)	自動車及び内燃機関が 駆動する装置の電気/ 電子装備品に関する電 磁妨害	Chairman : P.Andersen (U.S.A) Secretary : F.Ackermann (Germany)	WG1 : 建物内、道路沿い又は 屋外地域で使用の受信 機保護	CH : P.Andersen (U.S.A) Sec : F.Ackermann (Germany)	近田 隆愛 (スタンレー電気)
			WG2 : 車載及び周辺車両受信 機の保護	CH : F.Bauer (U.S.A) Sec : K.Hansen (U.S.A)	近田 隆愛 (スタンレー電気)
E小委員会 (Sub-committee E)	無線受信機の妨害に関 する特性	Chairman : E.Nano (Italy) Secretary : M.Borsero (Italy)	WG1 : 放射とイミュニティの 測定法と許容値	CH : E.Nano (Italy) Sec : H.Kolk (NL)	岡村 万春夫 (日本品質保証機構) 小原 正晴 (NHK) 岡崎 憲二 (ソニー)
			WG2 : デジタル放送受信機及 び関連マルチメディア 機器に対する許容値及 び測定法	CH : H.Kolk (NL)	岡村 万春夫 (日本品質保証機構) 小原 正晴 (NHK) 岡崎 憲二 (ソニー) 雨宮 不二雄 (NTT-AT) 鈴木 健次 (NEC)
F小委員会 (Sub-committee F)	モーター及び接点装置 を内蔵している機器、 照明装置及び類似の ものからの妨害並びに イミュニティ	Chairman : J.D.Coenraads (NL) Secretary : M.C.Vrolijk (NL) Assistant Secretary : W.Zuidinga (NL)	WG1 : モーター及び接点装置を 内蔵している家庭用電 器機器	CH : J.D.Coenraads (NL) Sec : M.C.Vrolijk (NL)	井上 正弘 (松下電器産業)
			WG2 : 照明器具	CH : M.C.Vrolijk (NL) Sec : P.Archer (U.K)	高野 安春 (東芝ライテック)
G小委員会 (Sub-committee G)	情報技術装置の妨害及 びイミュニティ	Chairman : R.J.Calcavecchio (U.S.A) Secretary : A.Frey (Germany) Assistant Secretary : K.P.Bretz (Germany)	WG1 : 情報技術装置からの妨 害波 (公衆通信網、L A Nなどに接続される 機器からの妨害波を含 む)	CH : M.A.Wright (U.K) Sec : I.P.Macfarlane (Australia)	雨宮 不二雄 (NTT-AT) 鈴木 健次 (NEC)
			WG3 : 情報技術装置のイミュ ニティ	CH : J.H.Davies (U.K) Sec : R.L.Storrs (Sweden)	山路 公紀 (日立製作所)
H小委員会 (Sub-committee H)	無線通信保護のための 妨害波許容値	Chairman : B.Despres (France) Secretary : C.M.Verholt (Denmark)			杉浦 行 (東北大学)

CISPR国際会議出席状況

開催年	開催地		代表者名
1939	ロンドン		金原淳(通信省)、上野七夫(NHK)
1953	ロンドン	12回総会	藤田徳彌(NHK)
1956	ブリュッセル	13回総会	三木七郎(NHK)
1958	ハーグ	14回総会	
1961	フィラデルフィア	15回総会	木村 勤(NHK)
1964	ストックホルム	16回総会	加藤一夫(RRB)
1967	ストレーナ	17回総会	
1970	レニングラード	18回総会	
1973	ウエストロングブランチ	19回総会	蓑妻二三雄(日立製作所)、遠藤幸男(NHK)
1974	ロンドン	合同委員会	宮島貞光(RRL)、木本(日立製作所)井上光雄(NHK)、 薮田保(高周波熱鐳)小堀(KDD)、岡村万春夫(機電検)、 清水(日立製作所)
1975	モントルー	合同委員会・臨時総会	蓑妻二三雄(日立製作所)、藤井為雄(協立)、岡村万春夫 (機電検)、黒沼弘(NHK)、山中克彦(電機工業会)、小高 (トヨタ)、川角(KDD)
1976	ニース	合同委員会	村主行康(RRL)、岡修一郎(電子機械工業会)、遠藤幸男 (NHK)、岡村万春夫(機電検)、山中克彦(電機工業会)、 珠玖(トヨタ)
1977	ドブログニク	合同委員会	宮島貞光(RRL)、遠藤幸男(NHK)、岡村万春夫(機電検)、 澤田嘉嗣(電力中研)、石橋(東電)、蓑妻二三雄(東京農工大)、 山中克彦(電機工業会)、崎村(自動車工業会)
1979	ハーグ	20回総会	蓑妻二三雄(東京農工大)、杉浦行(RRL)、岡村万春夫 (機電研)、澤田嘉嗣(電力中研)、島山鶴雄(高周波機械工 業会)、田中圭助(関西電力)、川瀬眞(国鉄)、黒沼弘(N HK)、山中克彦(電機工業会)、山口武久(トヨタ)
1980	東京	21回総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、宮島貞光(RRL)、 岡村万春夫(機電検)、牧野健一(東京電気)、村山博一(電子 機械工業会)、岡修一郎(電子機械工業会)、河野進(東芝)、 滝沢武(NHK)、遠藤幸男(NHK)、林靖(沖電気)、澤田嘉嗣 (電力中研)、笹野隆生(電力中研)、川瀬眞(国鉄)、金庭充 (電事連)、西本一成(東京電力)、近田隆愛(ホンダ用品研)、 佐藤和郎(トヨタ)、馬場耕作(日産)、梅原一洋(日立製作所)、 猪野淳之介(電機工業会)、山中克彦(電機工業会)、井上光雄 (電技協)、加藤忠雄(工技院)、緒方忠雄(RRB)
1981	トロント	合同委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、岡村万春夫(機電検)、 牧野健一(東京電気)、澤田嘉嗣(電力中研)、西本一成(東京 電力)、渡辺寿夫(国鉄)、黒沼弘(NHK)、梅原一洋(日立 製作所)、山中克彦(電機工業会)
1982	ストックホルム	22回総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、岡村万春夫(機電検)、 牧野健一(東京電気)、澤田嘉嗣(電力中研)、久保田司場男 (東京電力)、西尾兼光(日本特殊陶業)、梅原一洋(日立製作 所)、黒沼弘(NHK)、山中克彦(電機工業会)
1983	オスロ	合同委員会・運営委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、岡村万春夫(機 電検)、牧野健一(東京電力)、黒沼弘(NHK)、梅原一洋 (日立製作所)
1984	パリ	23回総会(50周年記念)	蓑妻二三雄(成蹊大)、関清三(NTT)、水戸部茂(NHK)、 上中田勝明(NHK)、岡村万春夫(機電検)、牧野健一(東京 電力)、伊藤陽之介(東芝)、富山勝己(三菱)、河村史郎(ト ヨタ)、久保英彦(国鉄)
1985	シドニー	24回総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、黒沼弘(NHK)、 山際正次(NHK)、結城主央巳(NTT)、川瀬眞(国鉄)、 岡村万春夫(機電検)、澤田嘉嗣(電力中研)、近田隆愛(スタ ンレー)、井上正弘(松下電器)、伊藤陽之助(東芝)

開催年	開催地		代表者名
1986	サンディエゴ	合同委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、岡村万春夫(機電検)、黒沼弘(NHK)、山際正次(NHK)、結城主央巳(NTT)、井上正弘(松下電器)、伊藤陽之介(東芝)、高川雄一郎(NTT)、木本徹(電子機械工業会)、上地護(日本電装)
1987	カリアリー	合同委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(RRL)、岡村万春夫(機電検)、山際正次(NHK)、結城主央巳(NTT)、近田隆愛(スタンレー)、井上正弘(松下電器)、伊藤陽之介(東芝)、井手口健(NTT)、細谷泰(ソニー)、荒堀能成(東芝)、西村隆雄(日本照明器具工業会)、高川雄一郎(NTT)、笹野隆生(電力中研)
1988	カンピナス(ブラジル)	25回総会	高木相(東北大)、蓑妻二三雄(成蹊大)、園城博康(郵政省)、杉浦行(CRL)、結城主央巳(NTT)、黒沼弘(NHK)、岡村万春夫(機電検)、荒堀能成(東芝)、近田隆愛(スタンレー)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、井手口健(NTT)、伊藤陽之介(東芝)、高川雄一郎(NTT)
1989	コペンハーゲン(デンマーク)	合同委員会	高木相(東北大)、蓑妻二三雄(成蹊大)、園城博康(郵政省)、田中耕作(郵政省)、杉浦行(CRL)、結城主央巳(NTT)、岡村万春夫(機電検)、河野通(東芝)、笹野隆生(電力中研)、近田隆愛(スタンレー)、黒沼弘(NHK)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、井手口健(NTT)、伊藤陽之介(東芝)、雨宮不二雄(NTT)
1990	ヨーク(イギリス)	合同総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、草川慶一(郵政省)、杉浦行(CRL)、篠塚隆(CRL)、結城主央巳(NTT)、田中喜好(NTT)、岡村万春夫(機電検)、河野通(東芝)、杉山昌(島田理化)、笹野隆生(電力中研)、富加見昌雄(JR東日本)、稲津雅弘(トヨタ)、黒沼弘(NHK)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、雨宮不二雄(NTT)、伊藤陽之介(東芝)
1991	ベルリン(ドイツ)	26回総会	高木相(東北大)、蓑妻二三雄(成蹊大)、菊池紳一(郵政省)、水町和寛(郵政省)、杉浦行(CRL)、篠塚隆(CRL)、結城主央巳(NTT)、雨宮不二雄(NTT)、小林一義(NTT)、平田健三(MKK)、岡村万春夫(機電検)、野田臣光(東芝)、杉山昌(島田理化)、笹野隆生(電力中研)、山本武仁(JR東日本)、川村武彦(鉄道総研)、川崎邦弘(鉄道総研)、近田隆愛(スタンレー)、和食暁(NHK)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、鈴木健次(日本電気)、伊藤陽之介(東芝)
1992	ワルシャワ(ポーランド)	合同委員会	仁田周一(東京農工大)、徳田正満(NTT)、蓑妻二三雄(成蹊大)、水町和寛(郵政省)、篠塚隆(CRL)、小林一義(NTT DoCoMo)、岡村万春夫(JMI)、福嶋義征(富士電波工機)、岸本卓郎(日本電気三栄)、野田臣光(東芝)、須永孝隆(電力中研)、山本武仁(JR東日本)、川村武彦(鉄道総研)、川崎邦弘(鉄道総研)、近田隆愛(スタンレー)、和食暁(NHK)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、雨宮不二雄(NTT)、伊藤陽之介(東芝)
1993	ロッテルダム(オランダ)	合同委員会	高木相(東北大)、蓑妻二三雄(東京理科大)、高橋浩二(郵政省)、徳田正満(NTT)、篠塚隆(CRL)、小林一義(NTT DoCoMo)、岡村万春夫(JQA)、野田臣光(東芝)、岸本卓郎(日本電気三栄)、安藤誠(電事連)、富田誠悦(電力中研)、川村邦弘(鉄道総研)、浦野純一(JR東日本)、川崎邦弘(鉄道総研)、近田隆愛(スタンレー)、長谷川祐之(スタンレー)、細谷泰(ソニー)、和食暁(NHK)、井上正弘(松下電器)、鈴木健次(NEC)、雨宮不二雄(NTT)、伊藤陽之介(長野高専)
1994	北京(中国)	27回総会	石田義博(郵政省)、高木相(東北大)、杉浦行(CRL)、蓑妻二三雄(東京理科大)、岡村万春夫(JQA)、近田隆愛(スタンレー)、結城主央巳(NTT DoCoMo)、黒沼弘(NHK)、井上正弘(松下電器)、徳田正満(NTT)、雨宮不二雄(NTT)、伊藤陽之介(長野高専)、大島良夫(JR東日本)、川村武彦(日本テレコム)、岸本卓郎(日本電気三栄)、篠塚隆(CRL)、鈴木健次(NEC)、野田臣光(東芝)、平田健三(MKK)、細谷泰(ソニー)、山路公紀(日立製作所)、富田誠悦(電力中研)、川崎邦弘(JR東日本)
1995	ダーバン(南アフリカ共和国)	28回総会	高木相(日大)、仁田周一(東京農工大)、徳田正満(九州工大)、加藤英二(郵政省)、杉浦行(CRL)、篠塚隆(CRL)、平田健三(MKK)、岡村万春夫(JQA)、緒方善郎(電事連)、富田誠悦(電力中研)、広島芳春(NTT)、雨宮不二雄(NTT)、結城主央巳(NTT DoCoMo)、和食暁(NHK)、近田隆愛(スタンレー)、井上正弘(松下電器)、大島良夫(JR東日本)、川崎邦弘(JR東日本)、川村武彦(日本テレコム)、鈴木健次(NEC)、野田臣光(東芝)、細谷泰(ソニー)、山路公紀(日立製作所)、西村隆雄(松下電工)

開催年	開催地		代表者名
1996	マンデリュウ (フランス)	合同委員会	高木相 (日大)、仁田周一 (東京農工大)、徳田正満 (九州工大)、島崎俊隆 (郵政省)、杉浦行 (CRL)、篠塚隆 (環境電磁技術研)、山中幸雄 (CRL)、岡村万春夫 (JQA)、富田誠悦 (電力中研)、雨宮不二雄 (NTT)、桑原伸夫 (NTT)、野島俊雄 (NTT DoCoMo)、石井洋一 (NHK)、近田隆愛 (スタンレー)、井上正弘 (松下電器)、茂澤清行 (JR東日本)、厚沢誠 (JR東日本)、川崎邦弘 (JR総研)、川村武彦 (日本テレコム)、鈴木健次 (NEC)、野田臣光 (東芝)、細谷泰 (ソニー)、山路公紀 (日立製作所)、高野安春 (東芝ライテック)
1997	横須賀 (日本)	合同委員会	高木相 (日大)、仁田周一 (東京農工大)、清水康敬 (東京工業大)、徳田正満 (九州工大)、越後宏 (東北学院大)、杉浦行 (CRL)、岡村万春夫 (JQA)、近田隆愛 (スタンレー)、野島俊雄 (NTT DoCoMo)、井上正弘 (松下電器)、雨宮不二雄 (NTT)、篠塚隆 (環境電磁技術研)、富田誠悦 (電力中研)、山中幸雄 (CRL)、鈴木健次 (NEC)、山路公紀 (日立製作所)、細谷泰 (ソニー)、高野安春 (東芝ライテック)、川崎邦彦 (鉄道総研)、小原正晴 (NHK)、後藤悦隆 (電子機械工業会)、桑原伸夫 (NTT)、水野良之 (電事連)、小川和之 (矢崎総業)、多田紀一郎 (三菱電機照明)、城戸大志 (松下電工)、岡崎憲二 (ソニー)、大島良夫 (JR東日本)、工藤司 (JR東日本)、比留間光一 (電事連)、粕谷英夫 (日産自動車)、市川裕二 (トヨタ)、大岩克彦 (デンソー)、岩淵康司 (日立ホームテック)、森浄 (オリンパス)、佐々木宏 (松下電器)、篠原茂 (電機工業会)、田路明 (カシオ)、森利行 (日立製作所)、長部邦広 (松下通信工業)、山口輝彦 (通信機械工業会)、大石亮 (キャノン)、山口高 (VCCI)、山口正徳 (富士通)、長沢春美 (日立製作所)、田島公博 (NTT)、小林隆一 (NTT)、中川稔也 (ノイズ研)
1998	フランクフルト (ドイツ)	第29回総会	仁田周一 (東京農工大)、徳田正満 (九州工業大)、杉浦行 (CRL)、岡村万春夫 (JQA)、近田隆愛 (スタンレー)、野島俊雄 (ドコモ)、篠塚隆 (環境電磁技術研)、雨宮不二雄 (NTT)、山路公紀 (日立製作所)、井上正弘 (松下電器)、高野安春 (東芝ライテック)、鈴木健次 (NEC)、富田誠悦 (電力中研)、川崎邦弘 (鉄道総研)、小原正晴 (NHK)、岡崎憲二 (ソニー)、山中幸雄 (CRL)、大島良夫 (JR東日本)、比留間光一 (電事連)、岩淵康司 (日立ホームテック)、松井良明 (スタンレー)、森利行 (CIAJ)、山口高 (日本IBM)
1999	サンディエゴ (アメリカ)	合同委員会	仁田周一 (東京農工大)、杉浦行 (CRL)、岡村万春夫 (JQA)、近田隆愛 (スタンレー)、野島俊雄 (ドコモ)、篠塚隆 (環境電磁技術研)、雨宮不二雄 (NTT)、山路公紀 (日立製作所)、井上正弘 (松下電器)、高野安春 (東芝ライテック)、鈴木健次 (NEC)、富田誠悦 (電力中研)、川崎邦弘 (鉄道総研)、小原正晴 (NHK)、岡崎憲二 (ソニー)、山中幸雄 (CRL)、岩淵康司 (日立ホームテック)、勝山芳郎 (富士通)、田島公博 (NTT)、水野良之 (電事連)、堀内雄人 (郵政省)
2000	サンクトペテルブルグ (ロシア)	合同委員会	仁田周一 (東京農工大)、徳田正満 (九州工大)、岡村万春夫 (JQA)、杉浦行 (東北大)、野島俊雄 (NTTドコモ)、近田隆愛 (スタンレー)、篠塚隆 (CRL)、雨宮不二雄 (NTT-AT)、山路公紀 (日立製作所)、井上正弘 (松下電器)、高野安春 (東芝ライテック)、鈴木健次 (NEC)、富田誠悦 (電力中研)、岡崎憲二 (ソニー)、山中幸雄 (CRL)、岩淵康司 (日立ホームテック)、田島公博 (NTT)、塚本克己 (電事連)、市野芳明 (TELEC)、田上雅照 (富士通)、矢島潔 (郵政省)

EMCCレポート ～蓑妻二三雄先生追悼文集～

平成12年12月4日 発行

編集発行 不要電波問題対策協議会

Electromagnetic Compatibility Conference Japan

〒100-0013 東京都千代田区霞が関1-4-1 (日土地ビル)

社団法人電波産業会内

不要電波問題対策協議会 事務局

TEL 03-5510-8596

FAX 03-3592-1103

—無断転載を禁ず—

